

(1) 伝為遠筆本金葉集

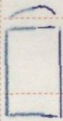
伝為遠筆本 (巻頭)

(吉田幸一博士蔵)

(其の一)



まづ為遠本の奥書とみると諸本と共通する  
ものと本写本のみに見えるものとがある。今  
類別して便宜上次の如く三つに分けて書いて

おこ  
う。  
（内は本書のみにあり。）

(A) 本云

承元五年二月二日書写之勝命所進

本也。此本世以希物也。誠可秘く

光阿弥陀佛

(B) 本奥書云

抑此集者目白河院御讓位之末。

ナシ(良経本・続群本)



俊賴朝臣奉

院宣撰之。

天治元年

奉勅。

大治元二之間。

此集本不定也。

奏覽之

初度進隨之

給之。

本。

一番款 = 八三宮御款也。

トシノウケニハル夕ケクレハヒトセニ

フタヒキマタルウケヒスノコ正

第二度進覽之本。

一番款題季作也。

ウケナヒキハルハキニケリヤマカハノ

イハマノコホリケフヤトクラム

此季の世間流布也。

已上ニケ

度皆返給了

等ノ字アリ(続群本)

以(續群本)

被返下(今本)

宣(續群本)ナレ(今本)

御款(續群本)

ナレ(續群本)

宣(續群本)ナレ(今本)

二三日奏之(續群本)



第三度奏覽本。一番哥○重良經本・續群本之作也。源アリ

ヨシノヤマミ子ノ之ウユキイツキエテ

ケサハカヌミノタケカハルラム

奏(良經本・續群本)

今度進覽之本。無左右被納了。

以撰者之自筆書造紙云々件本者。

拾遺集、玄々集哥等多以入之。

珍重(續群本)

可指南興(良經本・續群本)

當本既是也。雖可書子細依有所

抄不記之

(C)

文治三年四月十四日書寫云々

同年五月八日付系圖了。於今本者少々略了云々。



〆撰者之自筆書造紙之件等者  
 拾遺集 玄之集可不多言  
 富平院足也雖可書子細依百不  
 秘不記之  
 又法三年四月高寺寫し  
 月廿六日付糸並ノおと  
 帯名少(略)

為遠本奥書

((B)の一部と(C))

(其の二)



以上の真書のうち、(A)・(C)は本写本のみ  
 あるもの。(B)は三奏本に共通して存するもの  
 である。但し良経本、續群書類従本と本文の  
 上に多少異同がある。(右傍にその校異を附す。  
 この中で良経本と<sup>續類従本</sup>爲遠本との両本に於ける最  
 も大きな相違はすでに吉田博士も指摘されて  
 いる如く前者に「可指南歟」とあるのに後者  
 に「<sup>レ</sup>雖可書子細、依有所缺不記之」とある  
 ことである。この書きふりにはかなりの経庭  
 がみいだされる。これはどういいう理由だろ  
 う



か。諸本共通の奥書(B)は実行が書写したものと  
 と思われのにこうした異なつた表現個所のと  
 ちうと一体実行は書いたであらうか。

先に示した校異により為遠本と良経本・続類

徒本の文体を比較してみると為遠本の方がぞ、

んざいでいてやや冗漫。他の二本ことに続類

徒本は簡潔ではあるか或る場合はていねいな

書きぶりである。これを表示すると次の通り。







の 方 が 書 写 当 時 の 心 境 で は な か つ た か 。 「 當	表 現 方 法 か ら 言 つ て も 「 當 本 既 一 即 カ 是 也 」 。	歟 。よ り も 具 体 的 な 表 現 方 法 を と つ て い る 。	せ び り な 書 き 方 を し て い る の で あ る 。「 可 指 南	す る と こ ろ が あ つ て 記 さ な い し と い つ た 思 わ	遠 本 の み が 「 子 細 に 書 く の が 至 當 で あ る が 抄	「 可 指 南 歟 」 は 續 類 後 本 と 良 經 本 は 一 致 。 后	の も あ る が ま た 異 同 も あ る 。と こ ろ で 尚 懸 の	(3) の み で あ る 。そ の 他 は 相 互 に 共 通 し て い る 。	以 上 の 表 の う ち 三 本 と も 共 通 し て い る の は
--	---	--	---	--	--	--	--	---	---



本珍重しといふ表現には、尸史的に長い時間の  
 回顧性が伴なつてゐる。また「可指南」の  
 反問的表現は、やや抽象的である。  
 良経筆本は、現存最古の写本であるが、実行  
 書写本の原形をそのまま伝えてゐるかどうか  
 は現在のところでは不明。転写の度数が未詳  
 であるからである。為遠本のみにある奥書  
 (A)・(C)をみると、すでに文治三年四月十四  
 日(1187)に書写され、ついで承元五年(1211)に書写さ  
 れてゐるこゝとが知られる。こゝで文治三年に

書寫されたいるといふことは良經の書寫より  
 も年代が古い意味に於て注意すべきであらう。  
 尤も途中の書寫が古いからと云つても事實  
 に於ては屬遠本の方が良經本よりはずつと新  
 しい。屬遠本にある「雖可書子細……」の文は  
 としかくも三奏本を公同したくない意をこめ  
 ているのであるから何か理由がありそうであ  
 る。筆者はこの問題を白河法皇と待賢門院と  
 の間のことに焦点をあてて考えてみようとい  
 みた。俊賴が三度まで金葉集改編に苦勞を重



ね、三度目の奏賢本がやつと院の嘉納となつたのであるが、それを院は何故に待賢内院の手許においていたのか。

待賢内院については「今鏡」に（すべらぎの中第二）

「この帝（崇徳院のこと）の御母后璋子、十九と

申し、御齡、生み奉らせ給ひて、皇子位

に即かせ給ひて後、后の位世三の御齡、

去らせ給ひて待賢内院と申す。同じ國

母と申せども、白河の院御娘とて養ひ申

さ、せ給ひたれば、雙びなく学えさせ給ひきし。

と述べている。待賢内院璋子は公実の女で実  
 行の妹。ところか今鏡にあるように白河院の  
 御娘として育つてやがて入内。白河院の藤原  
 を一身に集めて宮中では鳥羽天皇との間に崇  
 徳、後白河を生子給うている。彼女もとりま  
 く女房たちには待賢内院堀河を始め、安芸、  
 新少将（俊賴の女）、兵衛、中納言、加賀などの  
 女流歌人がいて妍を競うた。璋子はその中心  
 に若い中宮として宮廷サロンの場を華々しく  
 形成していったのである。ところでは「十一代集



才子伝レ（巻第一帝王）とみりと次のような記事がある。（崇徳院の條）（園点筆者）

「天皇諱顯仁、鳥羽院第一皇子。母待賢内

院、中宮藤原璋子、大納言公實之女也。或曰、公

實女爲白河院猶子、入内。先レ是白河院密奸、

璋子。故崇徳院實白河院皇子也。……」

この事は白河院と璋子とのたがなうぬ関係

を暴露した記事になつてゐる。事の眞偽は別

として少なくとも二人の肉柄が皇帝を越えて

いた一つの資料であらう。三奏本が待賢内院

の手許に届けられていたことも何の不思議も  
 ない。しかも璋子の兄八條太政大臣藤原実行  
 がそれを借覽書寫したこともごく自然であつ  
 た。実行の妻は六條顯季の女であり、顯季は  
 岳父という近い關係にある。実行はその家で  
 「六條宰相家歎合」(永久四年・俊賴 62才の時)  
 「右兵衛督実行家歎合」(元永元年・俊賴 64才)  
 等の歎合を開催し判者はいずれも顯季。俊賴  
 は作者として二度と出席しているという風  
 に歎壇的に親しい交流を持つていた。実行が



俊頼の三奏本を待賢内院を通じて書写し得た  
ことは全く良き機会に恵まれていたといふこ  
とが出来よう。しかし当時の歌壇をみると一  
方には内大臣忠通を中心とする一派があり、  
顕季を中心とする一派、白河院近臣グルー  
プなど複雑なかり、み合いをもちつゝ推進して  
いた当時であり、三奏本をそうした複雑な歌壇  
にすぎぬそのまま公開することには白河院御自身  
も何かと抵抗を感じておられたし、ごく一部  
のグループのみは自然知られたれば致し方

はないとしても待賢門院の手許あたりには置いておけば、撰進者俊頼自身の手許にも草稿はない事だし一般にはまづ知らわたるに配はなかつたわけである。院と璋子の私的関係を熟知していたのは璋子の兄実行であつた筈であり、同時にこの頃の歌壇の事情にも実行は精通していた筈である。

ところで観点をかえて璋子を中心とする政治的背景についてこの問題も実は関係が深いのでこの事につき若干述べると要がある。これ



は白河院と攝南家との対立にからまる肉題に  
もつながる。白河院は南白忠実の女泰子を鳥  
羽天皇の後宮に納れようとしたが結局、忠実  
はこの入内を固辞した。また璋子についてほ  
忠通（忠実の子）に嫁がせようとの思召しがあ  
ったが、璋子についてほとかくの風聞があり  
忠実はこれを強く反対し結局鳥羽天皇への  
入内ということに決着した。これらの事から  
忠実失脚という政治的向題にまで発展し白河  
院と攝南家との対立は益々その溝を深めた。

三奏本のあつたことはたとい一和歌の問題であつても勅撰集という権威ある歌集の重みに支えられ白河院にあつては私的に、歌壇的、政治的にそれ〈 〉憚るべき要素が多分にみうけられたに違いない。実行が三奏本  
 三奏本の奥書に「當本既是也。雖<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>書<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>依<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>缺<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>記<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>。」とあるのは以上述べた複雑な様相を物語るもので、この書き込みはやはり実行自身ではなかつただらうか。為遠本はこ



れをもそのまま継承して書写したものと筆者は推測する者である。『常本珍重』可指南歟。と云つた表現はむしろその後、書写に當つての誰かの改意であつたように解されるのである。以上を遠本と良經筆本、續類從本における眞書の異同についての私見を諸般の情勢に基づき考察してきた次第である。

次にこれら三本の間には款員數に多少の異同があり、これを示すと次の通り。

第八 恋下	第七 恋上	第六 別離	第五 賀	第四 冬	第三 秋	第二 夏	第一 春	出し 款 数	各 卷 の 見
84	67	25	27	54	111	50	97 <sub>首</sub>		
81 (一首欠)	60	25	27	51	111	50 (一首欠)	90 (下六首欠)	良 經 筆 本	実
82	60	25	22 (下五首欠)	52 (一首補入)	111	51	95 (一首欠)	続 類 從 本	
83 (二首補入)	60	25	27 (一首補入)	52 (一首補入)	111	50 (一首欠)	96	為 遠 筆 本	数



るのみ。その上別に補入款もありこれを入れなくてもその数は最	ぐ丁欠があるが為遠本にはなく只一首の欠がある	は少ない。この中良経本、続類徒本にはそれ	以上の表の如く三本とも記載款教より実教	總計 670首	補入款数	脱落款数	(連歌) 11	第十雜下 46	第九雜上 98
				641首	(ナシ)	(八首)	11	46	89
				644首	(一首)	(六首)	11	46	89
				650首 (補入数を除く)	(連歌六首 款五首)	(一首)	(六首 補入)		(一首 補入)

も多い。しかも良経・續類從本の欠は為遠本  
 によつて完全に補充することが出る。ここ  
 に為遠本の本文価値を見出すのである。しか  
 し為遠本にも不備な欠陥が本文上に存してい  
 る。その他本写本のみには有する本文上の特質  
 もあるので以下これらについて述べる。

### △卷二

この卷に於ては次の一首が詞書を含めて脱  
 落している。

権中納言實行卿の家の歌合に郭公をよめる

左京大夫經忠

○年ごとにきくとはすれど郭公声はふり  
せぬ物にぞありける

どうしてこういう脱落がおこったのである

うか。三奏本ではこの歌の直前に攝政左大臣

の「ほととぎすすすがたは水にやどれども声はう

つらぬ物にぞありける」の一首があるが爲遠

本をみるとこの一首はあるにはあるが後に追



加書き入れの形で一行に小書きで挿入してい  
 る。ところでは、兼好本（精撰本）をみると「年ご  
 とに」の直前に三奏本では除去された「ほと  
 とぎすき」とかたる人づての「源雅光」と  
 「ほととぎすを」とはの山のふもとまで「橘成  
 元」の二首がある。為遠本では除去された歌は  
 すべて上欄に片仮名書きで記入してある。そ  
 の片仮名書きの中に「年ごと」に「」の歌が含ま  
 れているのである。つまり「攝政左大臣」の  
 歌は書き落としていたが、後で気がつき挿入し

続いて書寫する時に經忠の款は当然三卷本に入  
るべき筈なのに除去する款と同様に上欄に  
小書きにしてしまったため本欄には姿を消し  
てしまつたといふ誤謬を冒す結果になつたも  
のと思われれる。これは爲遠本の欠陥である。  
良經本、續類從本にも經忠の款は掲載され  
ているのでこの両本の方が正しい。

### △卷三

この巻に於ては爲遠本に款の順序配列上不  
備な点がある。良經本・續類從本(同じ順序)と

対照するに次の通り。

馬遠本

良経本  
純類従本

萩をよめる 太宰大貳長実

しらすげのさのまののはきはら雨露ながら  
おりつる袖ぞ人なとがめそ

度とよめる 藤原顕仲朝臣

よの中とあきはてぬとやささをしかの  
いまはあらしの山になくうん

顕隆卿家歌合によめる 権中納言俊忠

しらす露をたまくらたしてをみなへし  
野原のかぜにおれやしぬらん

心ゆきみなへしをよめる 藤原顕輔朝臣

しらす露やこころとくらんとみなへし  
いろめく野べに人かよふとて

(1)

(2)

(2)

(1)

(3)

(3)

(4)

(4)



右のようにならば、爲遠本の順が良経・續類・從では  
 逆になつてゐる。これを考へてみるに、爲遠本  
 の(1)の前には俊頼の「さをしかのなぐねは野べ  
 に」の「野辺圃底」を主題とする歌がある。  
 爲遠本の如くその歌の次に「菰を主題とする  
 (1)の歌が来ることは、勅撰集の構造の上からみ  
 て不合理である。当然この順序は良経・續類  
 従来の方が正しいのである。これは書写の際  
 に誤つてこゝうした順序になつたものであるう。  
 なおここの歌の校異を示した。爲遠本の右

傍に附したのには良経・續類徒本にあるもの。

ここで注意すべきは(4)の歌の作者が良経・續類

徒共に「藤原顯仲朝臣」となつてゐるが、こ

れは「左京大夫顯輔卿集」(P.514) (群書類徒本第二四五所収)

にも「白露や心とくらんとあり、本文、作者名

ともに馬遠本の方が正しい。

△卷四

この巻に於ては巻末に、左の一首

○なに事をまつともなしにあきくれて

は(續類)

けい

國信經イ(續類)

ことしも今日になりけるかな(中納言國經イ本)

が異本によつて書き加えられている。これは  
は続類徒本にもあり、(校異<sup>多</sup>あり)このため属<sup>遠</sup>本、  
続類徒本では良経本より一首多い結果になつ  
た。しかし古鈔本たる良経本にこの一首がな  
いので三奏本としては保有しないのが正しい  
と思われる。

### △巻五

この巻にも巻末に次の一首が異本によつて  
書き加えられている。



前齋院伊勢におはしましけるころいしなとりのいしあはせ

といふことをせさせ給けるにいはひの心をヨメル 源俊賴朝臣

○クモリナクトヨサカノボルアサヒニハ

キミゾカゾエンヨロヅヨマデニ

この事を考えてみると、  
 〽印の合點のある  
 ことと歌が片仮名の  
 ナ書きになつて  
 いる所から  
 異本により加え  
 られたことが推測  
 される。  
 また一方この一  
 首を加えると巻頭  
 に記載した七七首  
 を超えることにも  
 なり、三巻本とし  
 ては保有しない  
 と考えた方が正し  
 く良経・續類  
 徒本にも勿論ない。

なお、この巻に於て続類徒本には周防内侍の歌の次に「いはひの心をよめる」(藤原通経の「君が代は」の歌の詞書)以下五首を欠いていゝ。続類徒本には「此間一枚闕」(P.20上段)とあり、この欠は良経本・為遠本で補充出来る。

△巻八

この巻には三本の間に於て歌の異同があり複雑。まず為遠本のみにある歌は次の一首である。〔巻末に近い所で(為遠本 106 下裏)「題読

人不知」の中の一首〕

○あふことはなからふるやのいたいとみさす

がにかけるとしのへねらん

この歌は兼好法師本には存してあるので精

撰としてほまだ除去されなない歌とみてよい。

それ本良経本、続類従本では除去されて為

遠本には残存しているといふ風に精撰本から

三奏本への移行過渡的時期に於てはいまだ採

否いずれとも決定していなない歌もあつたので

はなかつたか。なか／＼この辺のところは複

雑である。異本による書き込みのあるのはそのためであろう。



なお、この巻末にはまた異本により左の二

首が為遠本に書き加えられてゐる。

恋歌としてよめるイ本 春宮大夫公実

○あふことはふな人よはにこぐふねの身をさ

かのほるここちこそすれ

恋歌人々ヨミケルニヨメル 源俊頼朝臣

○あさましやこはなにごとのさまぞとよ恋せ

よとてはむまれざりけり

この二首も兼好筆本にはある。俊頼の後の

歌は兼好筆本の第八巻の最後に書いてあるも

の。この二首は良経・続類徒二本にないところから三麦本には除去された歌とみる方が正しい。

## △巻九

この巻には三本ともに歌数は同じ。但し、

すでに吉田博士が指摘した如くに  
〔東洋大学紀要〕  
 第六輯

良経・続類徒本に赤染衛門の歌を誤って、馬

内侍の歌としていることである。これなども

馬遠本の出現によつてその緯緯が学界に明らか

かになつたもので吉田博士の学恩を多とせね

ばならない。ここでは詳しくは繰り返さない

が、後拾遺卷十六に入集の馬内侍の歌及びそ

の詞書

「宇治入道前太政大臣近衛左にて侍け

る頃一条左大臣の家にかかりそめてかかるとなんあり  
とほしりたりやといひをこせて侍ける返事にツカハシケル  
」

○はるさめのふるめかしくもつくるかなはや

かしはぎのもりにし物を

とを厚遠本では新しく補入させているが、こ

の歌の代りに厚遠本の上欄に片仮名で書いて

結局三奏本で不採用になつた次の、

「

丹波ニテアマノハンダテラミテ

赤染

○ヲモフコトナクテヤミマレヨサノウミノ

アマノハシダテミヤコナリセバ

の一首をフはるさめののの代りに入れてし

まつたということである。これは良経・続類

徒本のの大きな誤謬であり、当然正されねばな

らない。（「おもふことと」の歌は千載集卷八（四

旅歌）にも入集している。ここに考えられるこ

とは俊賴は馬内侍のフはるさめのの歌を新し

く三奏本として採用したのであつた。赤染

のフ思ふこととなくてやみましの歌を上欄に書



き込んでいるのは、こゝした畧本もあつたの  
であらう。それでなくては突然赤染の歌も記  
入する筈はない。畧本をみるとこの西首に  
は左肩に<sup>〃</sup>印の合點をほどこして<sup>〃</sup>いる。この  
合點は<sup>〃</sup>此左墨點者不入<sup>〃</sup>茅二度本歌也<sup>〃</sup>とい  
う意味のもので新しく入集せしめた歌である。  
しかるに赤染の歌は不採用になつたから三  
奏本として正式の歌は馬内侍の<sup>〃</sup>はるさめの  
しの歌であるべき筈なのに以上の経緯で良経  
・續類徒本には誤つて赤染の歌を止めよう

な結果になつたのである。

△卷十

この巻に於ては他の二本と歌の数には異同はない。但し続類従本の初度本や精撰本にも

みえる連歌六首を「七十にみちぬるしほのは

まひさし久しく世世々に(續類従本)にもむもれぬるかなしの一

首を書き加えてゐる。これは烏遠本の特徴で

ある。その連歌は次の通り。(詞書は看畧)

(源頼光朝臣の前句欠)

(1)  
あさまだきからるの音のきこゆるは(相模母イ)

(2)

ひくにはつよきすまひくさかな

(よみ人しらす)

とるてにははかなくみゆるはなれど

ウツルスマヒクサ

(り)

(3)

あめふればきしもしとどになりけり

(り)

かささぎなうばかゝらましやは

(り)

(4)

梅の花かさきたるみのむし

(律師慶暹)

雨よりは風吹くなとやおもふらん

(あらは)

(5)

よるをとすなりたきのしらいと

ひ(兼好本)

(読人不知)

今一句みえず

くりかへしくるもわくとは  
みつれども

(り)

(6)

おくなるをもやはしらとはいふ

(なりみつ)

みわたせばうちにもとをばたてけり

(観道法し)

この六首の連歌は三奏本にあるべきもので  
 はない。為遠本の奥書を見ると文治三年と承  
 元五年の二回にわたって書写されていゝる。本  
 書の伝来としては万葉学者勝命（伝未評）の所  
 伝本を光阿弥陀仏と称する僧侶（伝未評）が  
 承元五年に書写した事になつていゝる。鎌倉時  
 代に所伝の乏しい三奏本が書写されていゝるこ  
 とは注意すべきである。ところでの六首の  
 連歌は一体いつ書き加えられたものであろう  
 か。書写の過程に於てか。それとも為遠自身



か。これを証するものはない。

誰かがその書写の間に三奏本以外の流布本

か、または精撰本系統のどの本かを見てこれ

を異本として最後に書き加えたのであろう。

為遠の書写の際にはすでに書き加えられて

いたのかも知れない。最後に俊頼の一首「七

十にみちぬるしほの……」のあることも三奏本

としては正しくないのである。

いずれにしても為遠本に於て当然三奏本で

削除されていゝ笑のこれらの連歌六首、俊頼

の歌一首が書き加えられていることは正当ではない。こうした短所はあるにしても其一方爲遠本に於てはこれまで削除された歌が全部上欄に丹念に片仮名を以て記入されていくことは貴重なる資料として本書のみの価値を示すものである。

次に三套本の主要な諸本についてその特色を考えてみよう。

(2) 伝後京極攝政良經筆本

(内閣文庫所蔵)

平瀬陸氏の所蔵。現存最古の古寫本。一面

十一行。款は二行書き。その添状には

「此後京極筆金草集は、上加茂社家松下

攝津家に而前々より所有之處、此度取入

置ことの也。」

とあり、松田博士によれば、これは松田直兄の

識したものでその伝来は松下振津守から直見

に↓酒井家を経て↓平瀬家に入つたらしい。

鎌倉時代の古鈔本で雄健な筆致をもつと

ころが残念ながら装幀の破損の故か巻一の十

一丁が全部脱落している。その個所は吉田幸一

博士がすでに指摘された如くに為遠本では十

一丁表七行から十二丁裏一行に当たると。

(この個所は為遠本を以て補い得る意味に於

て次に為遠本の関係個所の一部を文献写真

で示した。調査のため筆者の書き込みで汚しており、その点お許しを乞う。)

62  
 漆山乳 栲皮在左  
 ミヨウキミエラククワツミレヘチ  
 シラヌアヤチミカリスルガチ  
 源俊賴

65  
 鞍馬大内ノ乳  
 阿利ナリケル時  
 クワリテヨスレ  
 永為ニ法師  
 アミナクラミ子ハカミラヌツヒ  
 フモトノツサヲネリテコトシ  
 前舟渡瓶希乳母

66  
 宇治前太政大臣家  
 赤合栲ノコロシ  
 カメル  
 ナリツミルニミソノミヌサウラジ  
 池セヨリヤニラツミサヤセハ  
 行尊信正

52  
 ハツルカ凡共  
 人マワルルセ  
 (49) 91

馬遠本十一丁裏の個所

(吉田幸一博士蔵)



その歌を示すと次の通り。(六首)

○はつせやまくもるにはなのさきぬれば

あまのかわなみたつとこそみれ

カトソミル

堀河院御時中宮御方にて風静花芽といへる

こととよめる

源 俊頼

○こずゑにはふくとも見えぬさくらほな

かほるそ風のしるしなりける

堀河

女御の御かたの

同院御時女御殿に女房あまたくしてはな

見けるによめる

ありきけるによめる

前齋院筑前乳母

○はることにあかぬにほびをさくらはな

いかなる風のをしまさるらん

(よめるアリ)

僧正行尊

人にかはりて

行尊僧正



○よそにてはおしみにきつる山さくら

花ノイロライ  
ラサリケレイ

おらてはえこそかへるまし

桜をよめる

後冷泉院御時皇后宮歌合によめる

又しくモナヲタツ子ミムトモアル歟

堀河右大臣

○はるさめにぬれてたつね人やまさくら

のアリ

くもかへしのあらしもそふく

いふにを

月前見花といへることをよめる

大蔵卿匡房

○月かけにはな見る夜はのうきくもわ

かせのつらさにおとらさりけり

水上花をよめる

源 雅尊朝臣

(注・厚遠本には片仮名の校異あり。赤にて示す。青は類徒本との校異を私に施したもの)

ところで以上の脱落箇所は爲遠本の26行分  
 の中にあり、それが良經本にあつては22行分  
 の範囲内であることを確かめ、しかもその中  
 にあつて先に圃人だ梓内の俊頼の歌一首とそ  
 の詞書とが續類徒本に脱落してゐることを發  
 見されたのは吉田幸一博士であつた。即ちこ  
 の事は爲遠本によつてのみ脱落六首を良經本  
 に補充し得るといふ爲遠本の本文価値につな  
 がると今時に續類徒本に一首を脱といふ新し  
 い事實の發見で学問的極めて重要な發言であ

つたわけである。思うに續類徒本の一首脱落  
 の原因は「こずゑにははしの俊頼の歌の詞書」  
 堀河院御時レまでには正しく書いてその次の「  
 春毎にレの詞書の「女御レに目移りして肝心  
 な俊頼の歌をとばしてすぐに「前畜院筑前乳  
 母レの歌を書写したためであらう。為遠本の  
 「はるごとレにレの詞書の初頭が「同院レとな  
 っレてレいるのに續類徒本に「堀河院レとなつて  
 いるのもそのためである。為遠本の如く俊頼  
 の詞書と初頭が同じであるから「同院レでよ

いわけである。但し、爲遠本にも誤謬はある。  
 この丁のみに於ても例えは爲遠本では「源俊  
 頼レとのみあるがこれは当然「源俊頼朝〇臣〇と  
 あるべきところ。また「行尊僧正レとあるが普通  
 の書式では「続類徒本の如く「僧正〇行尊レが正  
 しい。その他仮名遣いで「おしレ浮雲わ〇は、  
 「をレはレの方が正しい。また「かへるまじ〇か〇れ〇  
 は「け〇れ〇とあるべきところ。(爲遠本に於ては  
 ここに校異を施して「(な)おレくもかへしレは「  
 くものかへしレが正しくこれには臆字である。



△巻第二

この巻に於て良經本は次の一首を欠く。

を(續類從本)

○あやめ草わか身のうきにひきかへてなべて  
ならぬにおもひいでなん(権僧正永縁母)

あやめのねながきを宇治入道太政大臣  
の詩よりつかはしたりけるをみてよめる

高松上

(ながしとしもしら<sup>ず</sup>ねのみなかれつゝ……)の歌その次にあり。

このために「あやめ草」の永縁母の詞書「み

やつかへしけるむすめのもとに五月五日くす

ナレ(續類從本)

玉つかはすとてよめる「高松上の詞書のよ

うに誤られる結果になつた。(本来の高松上の

歌の詞書が永縁母の歌に含まれて脱落しているため)

△巻茅八

この巻では次の一首を欠く。

○よもの海にうらくごとにあされどもあや

しく見えぬいけるかひかな

返し

伊賀少将

これは書写の際に脱落したものである。

以上巻茅一に6首、巻二に1首、巻八に1首計

8首が良經本における脱落歌でこれらはすべ

て為遠本によつて完全に補ひ得るものである。

(3) 松田直兄模刻本

(内閣文庫所蔵)

松田直兄

(天明三年 (1783)

— 安政元年

(1854) 72段

は賀

茂の果主で正四位下伊予守にまで叙任された

学者で賀茂季鷹の門下。藤園と号した。古今

集を尊重し「言葉直路」の著を以てその名が

顕れたのであるが、一方金葉集研究史の上に

良経筆本

三奏本の模刻本を天保九年に出版したことは

特に注意すべきである。

この横刻本には初刷本と普通本との二種があり、その内容は勿論同じであるが形態上に相違があり前者はややカ型（縦八寸八分、横六寸一分、袋綴二冊本。楮紙）後者は（縦一尺、横七寸の大判袋綴三冊本。奉書使用）松田博士も蔵されてゐるが、内閣文庫にも蔵してゐる。（文献写真参照）



松田直兄模刻三奏金葉集

(内閣文庫蔵)

中納言朝臣

くりにの心のつらり春のつらり  
とよみくつらりつらりつらり

平曲師

あまのつらりつらりつらりつらり  
つらりつらりつらりつらり

女御

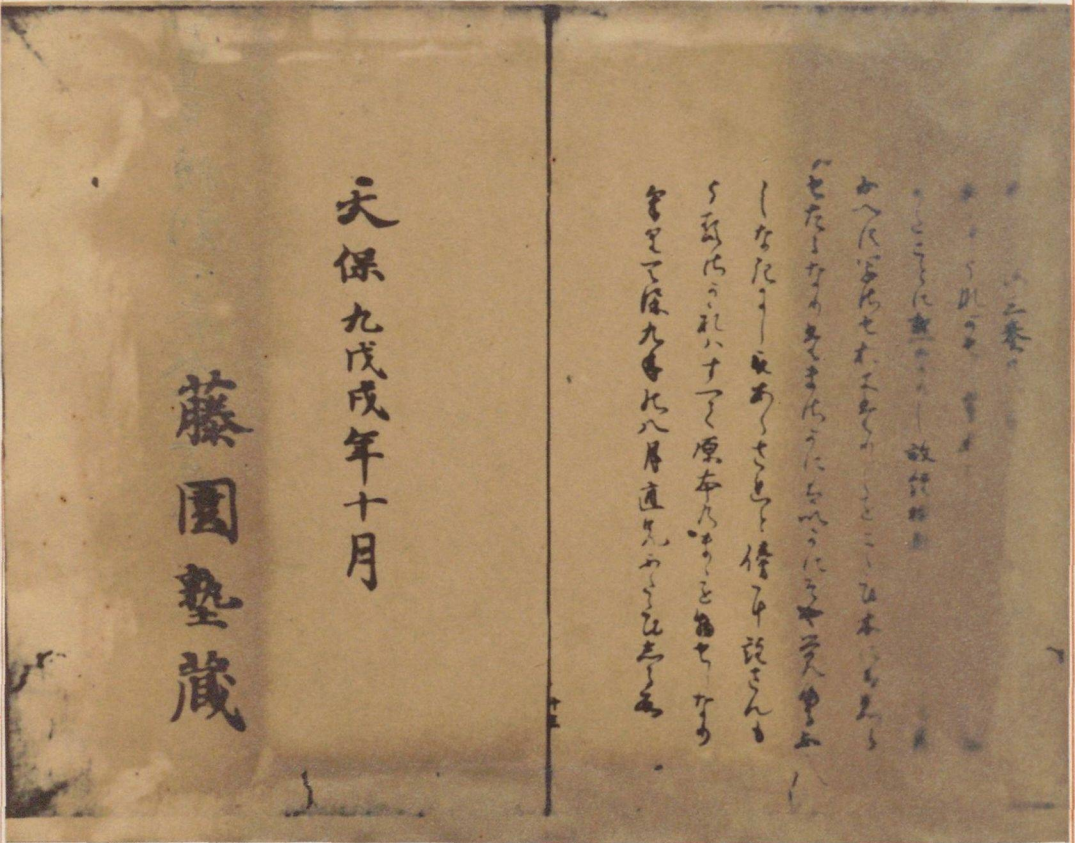
つらりつらりつらりつらり  
つらりつらりつらりつらり

藤原朝臣

つらりつらりつらりつらり  
つらりつらりつらりつらり

(巻第一春一丁裏)

(其の一)



天保九戊戌年十月

藤園塾蔵

三卷  
 此書は...  
 松田直兄...  
 天保九...  
 八月...  
 直兄...

(松田直兄模刻三卷本奥書)

(其の二)

直兄が本書刊行に當つての識語はその附録  
に委細述べている。

(1) 流布本、かの御けしきにもかなはざるに、  
世にひろまりたること、いといふかし。

(2) こゝ三奏本は、大治四年に法皇も崩じ給へ  
れば、とり伝へさせ給へる門院にも、い  
たく秘め給ひ、撰者俊頼朝臣も程なく卒去  
ありければ、いと世にはあらはれずな  
りたるべし。

(3) 良經公の書伝は道風朝臣の十一世朝方卿

より相承し給へれど、佐理卿の墨痕にな

らひて、さてみづからの一体を物し給へ

れば更にまがふかたも侍らず。しかも此

金葉集、例よりも御書体のうるはしきは、

そのかみだに世に稀なりし一冊なれば、こ

とに御心をこめて物し給へりし成べし。……

天保四年三月 正四位下 伊予守 加賀茂 景直 直見 識

(4) (一) 文献写真其の二の個所

「あたらし此三奏の一本、さてのみおくべき



なうずと類にうながせる輩あるもさるこ  
となれば、さるかた、ことに懇なりし故  
經樹鼻主に、一點をもたがへず書きせお  
きたりしを、こたび木にはゑらせたるな  
り。たまさかにはいかにかや覚ゆるふし  
なきにしもあらざれど傍に註さんもうる  
さかればすべて原本のまゝを物せしなり  
けり。天保九年の八月直兄ふたゝびしるす。

天保九戌戌年十月

藤園塾藏



以上識語の要点を摘記した。即ち、これは

(1) 二度本流布への不審 ↓ (2) 三奏本の秘めら

れた事情 ↓ (3) 良経の書風のみごとさ、とり

わけ金葉集書体の美麗なること ↓ (4) 三奏本

校行を思い立つた理由などにまとめられる。

(3) に天保四年という年記のあることはすでに

にこの頃刊行の意志のあつたことを示すもの

で、(4) の最後に「ふたゝびしるす」という追記

の形をとつているものも(3)以前の識語と呼応す

るものである。直見は(4)の識語でも述べてい

る通り、必ずしも良経筆本の全部を肯定して  
いるのではないが註を附すのも面倒で原本の  
まゝの姿を翻刻しようとしたのである。書  
体も美しいし寫本を作るより数少ない三奏本  
を良経筆のまゝに世に送り出したかつたにち  
がいない。普通の木版とは全く異なつた模刻モクカク  
といふ所にその特異性があり、三奏本を普及  
せしめた直兄の業績は高く評価すべきである。

(4) 南葵文庫旧蔵東京大学附属図書館蔵本

本写本は良経筆本の影写本であり、本文は直見刊行本と全く同じ。不思議文庫・阿波園文庫・陽春廬記・南葵文庫等の旧蔵印がずらりと押され、東京大学図書館に蔵されるまでの各所の経歴がこれによつて知られる。その奥書の特色としては、

(1) 万遠本の奥書を有していること。

(2) 本書のみの奥書

(3) 宗國本の奥書を有していること。

の三つから成っていることである。そして

(2) をみると、

(a) 「右文化十二年十一月八日、横田袋翁藏

本を以校正了。(朱書)

(b) 「右墨文政五年八月廿一日百花庵宗國本

を以校正了。

の二項あり、再度にわたる校合本であるこ

とが知られるのである。

そして、この東大本に校合を加えた横田翁

蔵本が遠本が現在吉田幸一博士の有に帰して

いるといいうことにならるのである。また(a)によ

つて天保九年八月に刊行された直兄の模刻本

より前に本書は書写されているといふ事実が

明らかになされるのであつて良経筆からの直接

の書写によるものであろう。その意味で本書

は直兄本とは兄弟関係をも有する性質をもつ

のである。

(3) の奥書をもつ宗因本の実態はいかなるも



のか不明であるが、宗固（元禄十六年 1703 | 天  
 明四年 (1784) 82才没）は江戸の人で鳥丸光宗・武者小  
 路実岳・冷泉為村らに数学を学び、その内下  
 に横田袋翁を出して、いるといいう師弟関係を有  
 して、いることほまづここで注意すべきことで  
 ある。宗固本の最後には為遠本と同様を六首  
 の連歌と後巻の「七十にみちぬるしほの」の  
 詞書「七十になるまでつかさなどもなくてよ  
 ろづに「つけてあやしき事のみ思ひつゞけてよ  
 める」とがある。（但し、歌はな<sup>い</sup>）これは「或本連歌」

としていろいろ。ここに宗國本と爲遠本との近似性が知られる。推測するに爲遠本を所持していた袋翁は先述の通り宗國の内人であり、宗國自身も秋学を修めており良經本以外の三奏本を所持していたことが知られる。さきに宗國本の実態は不明といたつたのであるが、こうしたことから推察するにおそらく宗國本も爲遠本の写本系統に属していたものとみてよいと思われ。

以上のことから東大本は、良經本の影写本

ではあるが、<sup>レ</sup>為遠本と宗國本とを以て校合し  
ているところ、にその特色があり、即ち、校合  
本として本書が本文批評の点からみても注目  
すべき所以がそこにある。さきにも述べたが為  
遠本に連歌六首、俊賴の「なゝそぢにみちぬ  
るしほの」<sup>レ</sup>の一首のある本が宗國本の依つた  
本文にもあつたことを証するものである。「  
或本<sup>レ</sup>連歌」<sup>レ</sup>はそのことを示す。この「或本<sup>レ</sup>のニ  
字は為遠本にはない。しかし為遠本も「或本<sup>レ</sup>  
に依つていることは確かであり、宗國本では

それを明らかにしており、伝本由来としては袋翁所持本であつた爲遠本の方が今日に伝わり、宇田本は東大本の中に校合の証本としてのみその名を止めたという結果になつたにすぎない。

東大図書館本は以上の如く良経筆本系統として、松田直兄模刻本よりも書写年代の古い写本の校合本であつたが、他に一冊直兄本より新しい嘉永四年十月廿五日松尾老隱書写本を草場茂一氏が蔵されてゐる由、これに

ては筆者は未見であり、松田武夫・吉田幸一  
両博士の指摘された良経本又は模刻本の写し  
であることのみを言っておこう。

以上、三奏本の各本についての特色を述べ  
てきた。同じ三奏本であつても必ずしも全部  
が一致してゐるわけではない。しかし三奏本  
として共通する一致点はある。それは二度本  
へ精撰本をも含めてを改修するに當つて多  
くの款を削除した一方また新たに加えた款、  
あるいは初度本からの復活と、いう復頼の改修



意識の底には初度本の再考と玄々集を考慮に入れたというのであつた。これと関連して拾遺集歌採用ということもからんでくる。これらへの向題について考えていきたいが、そのうちまず注意すべきことは、玄々集と三奏本との関係である。次にこのことから述べてゆこうと思う。

(二)

三奏本と玄々集

「玄々集」はいうまでもなく能因の撰んだ平安朝の私撰集で永延より寛徳に至る約六十年間に活躍した各階層の歌人九十一人の歌166首を収めていゝ。いわゆる平安中期の秀歌がここに集約されていゝと言つてもよろしく俊賴が三奏本を改修するに當つて第一の據り所としてその資料となつたのも理由あることであ

った。俊頼が平安朝の秀歌を玄々集に求めよ  
 うとした意識の中には秀歌もさることながら  
 能因という個人にも心を引かれるものを持つ  
 ていたことも否定出来ない。俊頼髓腦の中  
 には能因の逸話を多く伝えている。能因が父  
 経信と直接交渉をもつていたという親近感も  
 あつたであらう。かつはまた三度にわたる改  
 修には俊頼にとつては急を要することではあ  
 り、そうした際に能因の私撰歌集は手ごろな  
 資料の提供者であつたに相違ない。このよう

な事から復頼は改修に当たりまず、玄々集をその対象としたのである。しかしこの事は金葉集を新しくしようとする意図からみれば、実は逆な編集方針といわゆるを得ぬ。これはまた初度本の復活款とも関連することである。

西下経一博士は、これらに關係することとを「かくて三奏本で新に入集した款と、三奏本で復活した款とは共に優美であるとはいへ、物寂びた優美と花やかな優美とに區別される

であらう。し（「和歌史論」）とまことに要を得た形

（「和歌史論」  
第三章の三）

でまとめられた。同じ優美でも「ものさびたもの」と「花やかなもの」との相違であつた。いずれもこれは古典的平安朝の美であらう。

俊賴は二度本に於て革新的志向を表明したが三奏本に於ては再び伝統的なものへ回歸して行つたことにもなり、ここに金葉集自体にあつても初度、二度、三奏本という形態の中に内容がゆれ動くといふ現象がおこらざるを得

なくなり、その間にあつて玄々集、あるいは拾遺集といふ私撰、勅撰の歌集が介在し、三



妻木の性格が決定されたのであり、玄々集歌  
が三妻木に八十一首も入集し、拾遺集の歌が廿  
一首も入集して、いることは、ともかくも大き  
な変貌であつた。しかし、拾遺集がかくも多  
く採用されて、いることは編集面からみても固  
田希雄氏や谷山茂氏がすでに指摘されて、いる  
通り杜撰の謗りはまぬかれな、いであらう。  
かくして遂にこれまでにみをかつた次の、  
○よしの山みねの白雪いつきえてけさは霞の  
たちかはるらん

(源重之)

の一首が三奏本の巻頭を飾るに至った。この

歌は玄々集から採用し、今時にすでに拾遺集

巻第一春の部に入集してゐる歌でもあつた。

万遠本とみるとその歌の上にちや人と西歌

集名を明記してゐる。

さて、三奏本に採用した81首の玄々集歌は

初度、二度本には一首も見えず三奏本になつ

て始めて姿を現わした歌であることは注意す

べき事であり、しかもこれは初度本、二度本にみ

えず三奏本に入集した148首の55%を占めてお

り、また同時に玄々集全歌数 166 首（群書類従本による）  
の 48% に当たつて、いることになり、いかに俊  
頼が三奏本の編集にあたり玄々集を大きな資  
料として取り入れて、いるかということが知ら  
れる。玄々集と三奏本との関係は拾遺集及び  
後述する詞花集とも玄々集を介して極めて関  
係が深いので、ここで表示すると次のように  
なる。

三奏本の 巻別部立	一 春	二 夏	三 秋	四 冬	五 賀	六 別	七 恋 上	八 恋 下	九 雑 上	十 雑 下	計
(A) 三奏本の歌 数(為連本による)	96	50	111	52	27	25	60	83	89	46	650
(B) 三奏本中の 玄々集の歌数	11	2	22	8	2	8	11	7	10	/	81
(B)の(A)に対す る百分比	12%	4%	20%	15%	7%	32%	18%	9%	11%	/	12%
三奏本中の 拾遺集の歌	3	1	4	1	/	5	2	2	3	/	21
(内、玄々集と拾 遺集との重複歌)	2	/	4	/	/	/	1	1	3	/	11
(C) 詞花集中の 三奏本の歌	12	2	5	6	3	5	5	2	16	4	60
(D) (内、玄々集と詞花 集との重複歌)	4	1	1	6	1	5	4	2	12	4	40
(D)の(C)に対す る百分比	33%	50%	20%	100%	33%	100%	80%	100%	75%	100%	67%

以上の表で明らかになく三奏本の中で玄々集歌を最も多く採用しているのは秋の二十二首、ついで春・恋上の十一首、雑上の十首の順以下表の通り。百分比では別離が最高で秋・恋上・冬の順となる。これらを綜合して考えられることは玄々集のもつ物寂びた優美理念は別離、秋、恋上、冬などの歌に最もふさわしいものということがあるよう。

玄々集撰者能因自身後拾遺集時代の歌人であり、この中に採りあげられているのは、拾



遺集・後拾遺集の歌人が主体をなす。

俊頼が三奏本に採用した玄々集歌人の中最

も多いのは、拾遺集歌人長能の六首、ついで和

泉式部の四首、全じく道清の四首。後拾遺歌

人の最高は花山院の四首である。長能の多い

のは能因の最も尊敬していた関係で玄々集に

は十首も採用してゐる。これはやや偏向した

嫌いはあるが、こうしたことから三奏本にも

勢い影響されたものであろう。和泉式部、道

清も夫々玄々集所收五首の中から四首も俊頼

の採用しているのは多い数である。花山院も玄々集に四首採用され、俊賴はここでは全部入集させている。このようにみると俊賴は能因の多く採用した歌人を大方三奏本にも多く入集せしめているようである。尤も四條大納言については玄々集に六首も採用しているのに僅か一首しか俊賴は採つていない。これなどは例外で、俊賴は公任の歌は余り重くみていない。時代の最も古い歌人では後撰集の朝忠増基の歌を二首採用している。

次に三巻本に入集した玄々集歌人をあげて  
みると左の通り。(既出五人を除く)

(一) 拾遺集歌人

重之(二首)・道綱母(二首)・嘉言(二首)・

以下一首の作者。公任・惠慶・馬政・永香

殿女御・中務官・馬内侍・觀教・好忠・兼

澄・祐季・頼光・赤染・小大君(十六人)

(二) 後拾遺歌人

正言(二首)・以下一首の作者。小式部・伊

勢大輔・範永・道雅・義忠・雅通・寂照・

皇所宮定子・相模・安法々師女・出羽弁・  
清少納言・兼房・上東門院・家経・宇治入  
道頼通・弁乳母・江侍従・俊平(信寂)(三人)

(三) 金葉集初出歌人(後拾遺集時代)

明円(二首)・以下一首。高松上(頼宗母)・藤原登

平・僧都清胤(参議朝綱子)・交野女・民部内侍(六人)

さて、以上採用された去々集所収の三奏本の

歌人のうち、長能・道清・和泉式部・花山院

らは俊頼の太いに称揚した歌人であり、同一

人の歌から多く採用してゐるのである。その

他の作家は多くて二首入集の五人（重之・道

綱母・嘉言・正言・明岡）。他は凡て一首採用

の歌人である。即ち玄々集同様、俊賴も三奏

本採用については極めて広範囲にわたってい

るのがその特色といえる。

殊にここにて注意すべきは、歌人として名の

ある作家以外の(三)に属する人々の歌のこと

ある。これらの人々は金葉集に初めてみえる

作者であり、しかも玄々集を介して三奏本の

みに顔をつらねはかなく消え去つた人々で凡



そ巻のなき一群である。これらの人々の作品を何故俊頼が採用したのかという問題である。玄々集を介して入集の機を得たというのが前提になるのは勿論であるが、これらの僅かのしかも名のなき作者が参加している事は金葉集三巻本の一面の特色をうけもつた人達といえるであらう。たとい秋教は少なくてもこれら一群の作者達には色々の問題を含んでいゝ。以下これらを中心に考えてみたい。彼ら六人の生きていたのは、ほほ能因と同じ頃であ

った。(一)高松上は頼宗の母。頼宗といえは藤原

頼宗派の祖で道長の二男という名内出で基俊

の祖父。「和歌の道音にも取じずおはしきし

(今鏡)といわれた堀河右大臣で後拾遺の歌人

でもある。その母であるから能因よりしも

つと時代は古い。道長に嫁し四男二女を挙げ

ており、西宮左大臣高明の女である。

○長しとも知らずやねのみなかれつゝ心のう

ちに生ふる葛蒲は(茅二・夏・高松上)

この一首は主題「葛蒲」で続類従本と八代集

本とは「菖蒲」の歌は八首あり作品の共同は全くない。むしろ、ここには高松上の歌はな  
い。三奏本になつてこの八首の中「あやめ草  
ねたくも」(内大臣)。「玉江にや今日の」(公実)  
「あやめぐさよどのに」(公実)。「あさましや  
みしふるさと」(三宮)の四首を削除し、(同  
じ主題の菖蒲に公実の二首は多すぎると考え  
たのである)新たに高松上の前掲の歌を一  
首挿入した形になつてゐる。これは主題歌の  
削減にやう三奏本の方角であり、「菖蒲草わが

身のうきを（権僧正永縁母）の次に女流作品を  
 直接させ、しかも述懐歌的な二首を連接させ  
 たという所に特色がある。

一方名内でありながらさして歌人としての  
 名の高くもなかつた高松上を浮かびあがらせ  
 たという結果にもなつた。

(二) 明円聖人の伝は詳らかでない。

○なにならんと思ふくぞ堀り植ゑし女郎花

とは今日ぞ知りぬる（第三・秋・明円聖人）

主題は女郎花。  
 三奏本では(1)うづら鳴く

真野の入江の浜風に<sup>L</sup>といふ例の俊頼の名歌と

(2) 「あだし野の露吹きみだる秋風に<sup>L</sup>」(公実)

及び(3)の明円の「なにならん<sup>L</sup>」の三首で構成

されていゝ。このうち(1)は初奏本以来終始残

つた歌。(2)は類従本以来残つた歌であるが、

(3)は三奏本に至つて始めて玄々集から採用し

た歌である。つまり流布本には女郎花主題歌

は四首で構成。(1)・(2)の外に、(3)「今はしほほに出

ぬらんあづまぢの<sup>L</sup>」(藤原伊家)と(4)「ゆく人

をまねくか跡への花すゝき<sup>L</sup>」(平忠盛)の二首が



あつた。しかしこの二首を削除し明月の歌を  
 挿入したといふ形になつたのである。

伊家は後拾遺集歌人で金葉集には流布本に  
 二首入集、勅撰集には10首を伝えてゐる。忠

盛にしても金葉集流布本には三首入集。勅撰

集には11首を伝え家集も有していたほどの歌  
 人であつた。この二人の歌を削除し余り名も

知れていな<sup>い</sup>明月の歌を入集せしめたのはど

うい<sup>う</sup>理由であらうか。思うに、明月の歌の

詞書とみるに、房の前<sup>に</sup>女郎花を植ゑたりけ

る。	の	な	と	野	あ	郎	と	と	る
(3)	詞	詞	い	花	た	花	か	植	を
(4)	書	書	へ	と	り	と	な	ゑ	を
の	と	に	る	い	俊	聖	り	た	見
作	そ	終	こ	へ	頼	の	長	り	て
者	れ	っ	と	る	好	房	く	け	、
は	に	て	を	事	み	と	こ	る	院
金	応	い	よ	を	で	の	の	ぞ	源
葉	じ	る	め	よ	も	対	致	、	座
集	た	こ	る	め	あ	象	の	と	主
の	致	う	し	る	り	が	背	た	ひ
他	の	し	た	。 (4)	、 (3)	面	景	は	じ
の	方	た	も	に	の	白	を	ふ	り
巻	が	の	の	は	詞	く	述	れ	の
に	面	よ	より	「	書	書	べ	け	房
も	白	り	明	野	に	か	て	れ	の
す	い	の	円	花	は	れ	い	ば	前
で	の	で		留	「	て	る	よ	に
に	あ	あ		人 (4)	思	い	る	め	女
				人 (4)	い	る	女	る	郎
					る	女		し	花

採用してゐるし、思ひきつて棄てて明円の面

白い方の歌を入れたのはあるまいか。明円

の歌は玄々集に於てもこの歌一首のみで、そ

れをそのまま三奏本に転移したのであつた。

(三) 僧都清胤は参議大江朝綱の子と云うことは

知られるがその他このことは未詳。朝綱は後撰

集に三首入集の歌人。清胤は歌人として名の

ある僧でもなく三奏本に玄々集から一首採用

されたのみ。三奏本に初出で他の勅撰集には

詞花集に一首あるが、これは三奏本の歌と同

じもので作品としては三巻本の次の歌のみを  
伝えている僧である。

○君住まはましものよ津の國の生田の森

の秋の初風 (第三・秋・僧部清胤)

ところで右の一首は俊頼の好きな歌とみえ

て秋部の巻頭を飾るに至つた。これはなかく

興味深いことである。といふのは、金葉集秋

の巻頭の歌と初巻本からずつとみてみると、

流布本まですべて春宮大夫公実の「とことは

に吹く夕暮の風なれど秋立つ日こそ涼しかり

けれ<sup>L</sup>であつた。それが三巻本に至つて公実

の前に清胤の歌を巻頭に入れ、公実の歌は二

番目となつたのである。公実といえは後拾遺

以来の一流の歌人であつた。堀河百首には俊

頼と共に出席しており、この一首はその時の

歌で詞書には「百首歌中に、立秋の心をよめ

る<sup>L</sup>とあり、巻頭にはおさわしい歌でもある

。清胤の歌の詞書には「大江為基攝津の任は

ててのほりける後、初秋の日遣しける<sup>L</sup>とあ

り、公実の如く晴の百首歌で立秋の心と詠人



だのとはその詠歌の場をもとと異にしてい  
るといえよう。しかし、これを歌の内容から  
みれば清胤の方がずつと清新で生きている感  
を抱かせる。俊賴が清胤の歌を巻頭に持つて  
いつたのはおそらくそうした理由によるので  
はあるまいか。たといなき人にしてもし俊  
賴にとつては公実の歌より秀れているとみた  
のであろう。こゝろに徒未余り言わ  
れていないのだが、案外三奏本の性質が端的に  
表象されていよう。筆者は思ふのである。

(四) 源登平みかひらは、  
 玄々集の作者注に「土佐守従五

位下、正五位下加賀守爲憲男しとある。登平

にっいてはこれ以上のことは未詳で歎懐的に

は殆ど名の知れない人だつたろう。

○山櫻手ごとごに折りて帰るをば春のゆくや

人は見るらん（巻一・春・藤原登平）

の一首とどめるのみ。三巻本では藤原はらと

して、いるが、この同じ歌が詞花集春にも重出

してあり、ここでは「源登平みかひらとある。八代

集抄の作者注にも「伊賀守爲憲子しと玄々集

と同じ注になつてゐる。源姓が正しいである  
う。さて、「山櫻手ご」とに折りてし  
の歌は「咲  
く花」に「つく」  
散る花」を主題としており  
いはば「櫻」主題の歌でも配列として後半  
に位置づけられてゐることをまず注意する必  
要がある。そこでこの周辺の歌群を初度本か  
ら三巻本までの異同をみると次の如くなる。

				×	×	(60)	(59)	国歌大観 番号	
から 削 除 さ れ、 三 奏 本 の 最 も 大 き な 特 色 は 玄	下 共 通 の 歌 は (60) と (61) の 二 首 の み で (59) は 精 撰 本	こ の 表 で 明 ら か な 通 り 初 度 本 か ら 三 奏 本 ま	「木末には吹くとも みえで」(俊頼)	「けさみれば夜は の嵐に」(実能)	なし	なし	「花さそふあらし や峯の」(雅兼)	「春の日ののどけ き空に」(長実)	初 度 本
			あり	あり	なし	なし	あり	あり	続 類 徒 本
			あり	あり	なし	なし	あり	あり	流 布 本
			あり	あり	なし	なし	あり	なし	単 好 本 (精 撰 本 の 代 表 と す)
			「おのれかつちるを 雪とや」(俊頼)	あり	「いにしへの奈良の 都の」(伊勢 大輔)	「山姥手ごと 折りて」(登平)	あり	なし	三 奏 本
			(3)	/	(2)	(1)	/	/	三奏本の 新入歌

々集から (1) (2) を新しく補入させ (62) を削り新たに同じく俊賴自身の (3) の歌を入れ替えたことである。名もなき登平の歌を補入した俊賴の意識の中には題詠でなく「山花をたづねにまかりてかへさに人々手毎にをりてかへるを」という詞書の生きた背景を持つていたことと同時に、致そのものとしても晩春にふさわしいものであつたからであらう。ただ玄々集と重んずる余り伊勢大輔の (2) をここに配置させたことは咲き誘ふ歌であり、たしかに秀歌では

あるが杜撰であつた。また初度本以来精撰本

までずつと保有していた次の、

(62) 木末にはふくとも見えで桜花かほるを風の

しるしなりける (俊頼)

の一首が三妻本になつて、

(3) おのれかつちるを雪とや思ふらんみのしる

衣花もきてけり (俊頼)

に入れ替えられたのは何故であつたか。こ

れは二首とも撰者俊頼みずからの歌であるた

けに三妻本の特色を考へる上に重要な資料に



の	(五)	を	俊	し	く	る	歌	俊	な
も	交	あ	頼	た	珍	と	で	頼	る
興	野	げ	は	も	ら	(3)	あ	も	の
味	女	た	は	の	し	は	つ	精	で
深	を	の	は	で	い	趣	た	撰	あ
い	を	で	は	あ	の	向	。と	本	る
。	玄	あ	は	つ	で	と	こ	ま	。
彼	々	つ	は	た	こ	ろ	ろ	で	思
女	集	た	は	所	の	で	こ	は	う
も	か	。	(62)	に	の	こ	の	ど	に
僅	ら		は	こ	の	の	二	う	、
か	三		優	の	の	首	首	し	(62)
に	奏		美	の	の	を	を	て	も
金	本		を	相	の	比	棄	も	自
葉	に		情	違	の	較	て	撰	撰
集	採		趣	か	の	し	切	の	の
三	用		を	あ	二	か	れ	歌	と
奏	し		主	り	首	に	な	し	し
本	て		と	、	を	面	い	て	て
に	い				み	白			
	る								

ただ一首歌をひとめた名もなき女流である。

その歌と詞書を示すと次の通り。

片野に侍りける女のもとに、道貞朝臣かよひけるを、絶  
えて後飼ひける馬の放れて片野にまかりたりければ、かへしつかはすとて

○あふことの今は片野にはむ駒はわすれ草に

ぞなつかざりけるへなせ・恋・交野女)

この詞書を玄々集にみると「前斎院兵庫陸

奥守道貞がかよひける。かれくになりて後片

野の馬の放れければとりてやるとてしとあり、

多少相違しているが、おそらく玄々集の方が

生のまゝで金葉集はこれを変更したものであ

ろう。道貞は和泉式部の夫であり、交野女との肉係を知る上の資料ともなり、交野女の贈った歌としてまことに興味深い。歌そのものも連歌的内容を有し、俊賴が三妻本になつて新しく補入したのもそうした点にあつたのではあまるまいか。なお、この作者は以上の詞書により拾遺集時代の女であつたことが知られる。つづいて俊賴は同じく拾遺集歌人源兼澄の「わぎもこが袖ふりかけしうつり香のけさ」は身にしま物をこそ思へ」の一首を補入してい

るのもこの歌の内容の面白さに心をひかれた  
 ものであろう。時代としては古い拾遺集の二  
 歌人ではあるが却つて三奏本の特色がこうし  
 た所に出ている。古い意味に於てではなく、  
 観点を變えて新しく改編された意味において  
 である。

(六) 民部内侍も玄々集から三奏本に一首採用さ  
 れた女流。

○都にておぼつかたさをならはずば旅寝をい

かにおもひやらまし (巻大・別離・民部内侍)

三奏本の詞書には「資業すけなりいよへくだりける  
 時よめるしとある。資業とは(参議)藤原有國の男。  
 後拾遺集歌人である。これからして作者民部  
 内侍も後拾遺時代ということは明らかである  
 が、<sup>7</sup>勅撰作者部類しにも注がない。おそらく資  
 業と親しい件にあつた女官であろう。この歌  
 は詞花集巻第六別の巻頭にも重出。但しその  
 詞書には「参議廣業ひろのりたえてのち、いよの守に  
 て下りけるにつかはしけるしとある。玄々集  
 にも「藤原の広業ひろのり一首しとあり作者注として

その下に「参議有国男」と記している。単

介脈によると広業も有国の男ではあるが、こ

の人は歌人ではない。資業の謠であろう。

さて、この「都にて」の歌につづいて、

○人しれずものおもふことはならみにき花に

あかれぬ春しなければ（和泉式部）

○あかねさす日に伺ひても思ひいでよ都はし

のぶながめすら人と（皇后宮）

のニ首があり、これも玄々集から初めて三

奏本に補入した歌である。つまり流布本

(381)



はるかなる旅の空にも<sup>レ</sup>（源為成）と (362) 沖つ島  
 雲の岸を<sup>レ</sup>（<sup>共イ</sup> 爲政朝臣妻）の間に玄々集から採  
 用した三首の歌をそのまま俊賴は補入移動さ  
 せたのである。しかもこの三首は詞花集にも  
 採用されておられ、玄々集は金黃集三妻本及び  
 詞花集と三巴の形で互いに関係しあつてい  
 ることは、むしろこの別離の歌のみでなく全卷  
 にも言えることとで注意すべき問題である。（こ  
 の事について後は後述する）

名もなきこれら後拾遺集時代の作者を俊賴

が採用したことは、勿論金葉集の歌風という  
 大きな問題からいえば表だつたものにはなら  
 なかつたが、三奏本の特色としては看過して  
 はならぬものである。  
 かくして三奏本に於て玄々集所収の81首を  
 得、それは三奏本の12%に当たる比を示すこ  
 とにもなり、玄々集は俊賴により三奏本に脚光  
 を浴びたといふ結果をもたらしめた。このこと  
 は今時に三奏本独自の内容を決定する新しい  
 要因にもなつたのである。

(三) 三奏本と拾遺集

金葉集の中に拾遺集の歌が含まれていること自体杜撰の難はまぬかれないのである。ことに三奏本になつて多く採用した背後には玄々集を介して導入された形跡の見えることはすでに述べた(二)と軌を一にする意味に於て注意すべきことである。拾遺集と金葉集との関係は複雑であるので今これを個條的に整理し

てみるゝ次の如くなる。

(A) 拾遺集の歌はすでに二度本に於て三首の

入集をみてゐること。

(1) 遠かなる旅の空にも (源 為成) (別雜)

(2) 沖つ島雲井の岸をゆきかへり (友政朝臣妻) (別雜)

(3) 熊野に駒のつまづく (よみ人知らず) (雜上)

(B) 三奏本にはないが二度本にみえる拾遺集

が二首あること。

(1) おくれぬてわが恋ひをれば (よみ人知らず) (別離)

(2) うとましや木の下陰の (よみ人知らず) (恋下)

(C) 三奏本になつて新入集の拾遺集の歌は十九首に増加してゐること。(計廿一首)

(D) 以上の總計で金葉集採用歌は廿四首に及んでゐること。

(E) 三奏本新入集歌十九首の中、玄々集と一致する歌が十一首であること。

以上の様を實態が金葉集と拾遺集との關係に於てみられるのである。次にこれら拾遺集が三奏本に於いてどのように取り扱われ、またなぜ採用されたのか。その他の問題点を具

体的に考えてみたい。

◎ 第一春（三首・内二首玄々集と一致）

(1) よしの山峯の白雪いつ消えてけさは霞の立

ちははるらん（源重之）

この歌は三奏本になつて初めて巻頭歌の位

置に決まつた「初春の心をよめる」の詞書を有

する歌で白河院もこの歌を巻頭歌にみいださ

れることとを喜ばれたであろう。これまでの巻

頭歌「うちなびき春は来にけり」（題季）より

も拾遺集歌人ではあるがむしろ清新さが感じ



られる。俊頼はこの歌を玄々集から採用した  
のである。おそらく拾遺集から採用したので  
はなぐまず玄々集からの採用で、結果に於て  
拾遺集にもあつたといふことであらう。そこ  
に、俊頼の巻頭配置意図がこの歌に存していた  
と思われる。

(2) 紫の雲とぞ見ゆる藤の花いかなる宿のしる

し成らむ (大納言公任)

この一首も玄々集から採用した。歌の配置  
からみれば「藤の花」主題の初めに補入して

いる。  
公任の歌は玄々集には六首も入集して  
いるが、俊賴は僅かこの一首を三奏本に採用し  
た。

(3) 氷だにとまらぬ春の谷風にまた打とけぬ鳶

の声 (源 順)

この歌はすでに初奏本に入集。二度本に削  
除され三奏本に復活した一首で、この歌を中  
心に周囲三首をみると、直前が「雪消えは  
ぐの若菜も摘むべきに」(好忠)。直後が「わが  
宿に鴛いたく鳴くくなるは」(兼盛)であり、三首

と初度本復活。即ち配列構想からみると好  
思の一首は主題「春の雪」の一群に入り、後二  
首は「鶯」の主題となつて連接させたのである。  
順は後撰集撰者。梨壺の五人の一人。兼盛  
も後撰集撰人。好忠もこのころの人々と共に活  
躍した歌人で三人三首が揃つてここに復活し  
てゐるのは三奏本の内容を象徴するものであ  
らう。

◎ 第二夏（一首）

○ほのかにも鳴き渡るなる郭公み山をいづる  
 夜半のはつ声（城上望城）

望城も順と同じく梨壺の五人の一員。この  
 一首は天徳四年内裏秋合の時の秋で時代とし  
 ては古い。秋の配列からして郭公の初声に  
 あり、初度寺から復活させたのにも理由はあ  
 る。この秋、玄々集とは関係がない。

◎第三秋（四首。すべて玄々集秋と一致）

(1) 九重のうちさへ照らす月影にあたれる宿を

思ひこそやれ

（大江馬政）

この歌を配置させた理由は「禁中月」の主  
 題を新たに加えるためであつた。続いて花山  
 院の「こゝろみにほかの月をも見てしかなし  
 の「清涼殿の月」を補入したのもそのため、  
 為政のは玄々集から採用。それが拾遺集とも  
 重なつていたという結果になつたのである。  
 (2) おぼつかないづくさなるらん蟲の音をたづね  
 ば花の露やこぼれん (藤原長能)

この一首も玄々集から採用した。この周辺  
 をみると、二度本で削られた「有明の月はた

もとにながれつゝかなしき頃の蟲の声かなし  
 (赤染)の一首を復活させ、初度本以来の「露  
 しげき野辺にならひてきりくすし(前齋院六  
 條)「さゝがにの糸ひきかくる草むらにはたお  
 る蟲の声きこゆなり」(颯仲卿女)をそのまゝ  
 活かし、つゞいて「おぼつかかなし」を新たに補  
 入し、ここに蟲主題の歌四首を構成させたの  
 である。つまり、初度・二度では蟲主題歌は  
 二首であつたのを四首に拡大した事になるの  
 である。



(3) うつろふは下葉ばかりと見し程にやがて秋  
 にもなりけるかな (馬内侍)  
 これも玄々集から採用。この歌を中心  
 に四首はすべて玄々集採用の歌である。その  
 うちこの一首が拾遺集と重なり合っていたの  
 である。主題構成からみると、このうつろ  
 ふ<sup>レ</sup>を合めて前三首「何ならんと思ふくぞほ  
 り植し(明圓聖人)」「ぬれくもあけばまづ  
 見人宮城野のもとあらのわ萩妻れしぬらん  
 と本歌は、女郎花、萩の主題歌であり、後一

首「とりつなげみつのゝ草の放駒よどの河霧

秋は晴れせい」（藤原長能）は霧の主題歌を新た

に補入し、初度本以来から入集していろ「守

沿川の」（藤原基光）。「河霧の」（藤原行家）と共

に三首に構成させたという結果になつたので

ある。

(4) 湖に秋の山辺を映しては機張ひろき錦とや

見人（権大僧都観教）

この一首も玄々集と一致。この主題は「紅

葉」の因辺をみると、すぐ前には「山守よ斧

の音たかく聞ゆなり。葦の紅葉はよきてきらせ  
よし（大納言経信）の歌あり、後には初度本か  
ら復活させた。『紅葉葉をたづぬるたびにあ  
ねどもしへ江侍従』の一首あり、その他この紅  
葉の主題歌には新入歌もあり、流布本には知  
られぬ堀河右大臣、橘能元、前皇后宮美作、  
藤原長能らの類も見え、という風に三奏本の  
紅葉主題には俊賴もかれこれと配慮を用いて  
いるのが特色である。

## ◎ 第四冬（一首）

冬部には左の歌一首のみ。

○ 山木を朝な夕なにこりつみてさむさをこ

ふるをのゝ炭やき（曾祿好忠）

これは初度本の歌を復活させた一首で俊賴

好みの歌である。冬部には玄々集と拾遺集と

一致した歌は一首もない。但し、玄々集から

の採用は八首の多きに及びその比は15%にあ

たる。

◎ 第五賀には玄々集採用は二首あるが、拾遺

集からの採用は一首もない。

◎第六別離（五首）

第六の拾遺集採用歌は五首あるが、玄々集と一致したのは一首もない。従つて別離の巻に於ては玄々集とは関係なしに拾遺集から直接採用していることが明らかにされる。これとは別に俊賴は玄々集歌を八首採用しているのである。そして三奏本で新しく採用した拾遺集の歌は次の三首である。

(1) あかれぢをへだつる雲の上はこそ扇の風は

やらまほしけれ (能宣イ)

(2) 東路のこの下くらくなりゆかは都の月をこ

みざらめやは (大納言公任)

(3) いかでなを我身にかへてたけくまのまつと

もなら人行末の鳥 (能宣イ)

このうち (1) (3) ともに鳥遠本をみると能宣

イとあり、二首とも「能因朝臣集」(類徒本)

にはない。また能宣関係の歌合にも見当たらず

ないのでこの歌を能宣とするのは疑向がある



る。(但し、八代集抄にはともによしのふとあり校異も施していない。ここにも問題がある。)

なお、俊賴は(3)の歌を採用するにあたって拾遺集の「雜上」から「別離」に移動させている。(この事についてには後に述べる。)

次に二度本からすでに所収の拾遺集の歌は左の二首である。

(4) 遠かななる旅の空にもおくれねばうらやまし

きは秋の夜の月 (源 馬成)

(5) 沖つ島雲井の岸をゆきかへりふみ通はさむ

まぼろしもがな(友政朝妻妻)

この歌の周辺をみると、(4)と(5)の間、「都

にておぼつかなきを」(民部内侍)、「人知れず物

思ふことは」(和泉式部)、「あかねさすひに向ひ

てま」(皇后宮)の三首がいずれも新しく玄々集

から補入してあるのである。(この三首詞花集

にも採用されていゝる。)このうち(5)は前の(3)と

同じく拾遺集雑上から別離に移動させていゝる。

由末、「別離」の部などは四季の部と異なり、

時間的推移経過は必要でないし、歌の順序配  
列もこの点からは自由に別離に属する歌であ  
れば移動されやすい。(3)と(5)の例がまさしく  
それで二首とも拾遺集の雑上にあつた歌で内  
容からみれば別離の情を詠んだもので、俊賴  
はこのようにに部立の転移を歌の内容から見て  
試みたのである。また別な見地からすれば、  
二度本の「別離部」の歌員は僅か十七首であり、  
三奏本としてには歌員削減の方針ではあつたが  
別離部についてはいては、むしろ増加しよつた

のであつてその具体的を表現れば、このよう  
な別離以外からの歌をも別離部の中に転移さ  
せたのである。同時に玄々集から新たに三奏  
本では八首も採用。これは三奏本の部立別の  
な本で別離の比は32%の最高を示しているこ  
とによつても明らかである。

以上の如く要するに三奏本における別離部  
の特色としては拾遺集歌を更に三首新しく採  
用し、併せて玄々集から新たに八首採用。そ  
して二度本にあつた<sup>7</sup>をくわいて<sup>L</sup>(よみ人知らず)

「秋霧の」(基俊)、「朝日とも」(公実)の三首を削  
除して25首に落ちつかせた所にある。

◎ 第七恋上(二首。内一首玄々集と一致)

この巻に採用した拾遺集歌は次の二首。

(1) 人しれずあふを待つまに恋しなほ何にかへ

つる命とかいはん(本院侍従)

(2) なか<にいはひもはなたで信濃なる木曾路

の橋にかけたるやなぞ(源頼光朝臣)

(1) の歌にっいては後拾遺集にも入集。とこ

ろでこの歌は拾遺集では一・二句が「よそな

べらあひみぬほどにとあり作者もよみ人し  
 らずとなつていてかなり相違する。また後拾  
 遺集では、歌は同じだが作者が「平華盛」となつ  
 ているのが異なる。ところでは「華盛集」には  
 例の有名な「思ふれど色にまにけり我恋は」と  
 この歌とは並んで収められているのであるが、  
 この歌は天徳四年「内裏和歌合」<sup>(恋)</sup>十八番左に本  
 院侍従の作として右方中務と番えて出ている  
 一首でもある。これは一俣いずれが正しいの  
 であらうか。(今はこの問題にはふれない。本



院侍従<sup>L</sup>についてほかなり動靜不明な点もあり、  
今後後宥すべき肉題が残されてゐる。  
やはり今は本院侍従にしたがつておく。後  
拾遺集の誤記ではなかつたろうか。

(2) は玄々集とも一致。<sup>三奏本に於てこの歌  
と直前の「君まつと<sup>L</sup>の二首を補入したため</sup>  
俊頼自身の「よとゝもに玉ちる床のすが枕見

せばや人によほのけしきを<sup>L</sup>の一首を前の方  
に移動させてゐる。その他にも二度本と三奏  
本との間では歌の順序にかなり移動のあるこ

とが気づく。これは茅七巻の特色でもある。

◎茅八巻下（二首。内一首玄々集と一致）

この巻の拾遺集歌は次の二首。

(1) 夢とのみ思ひなりにし世の中を何いまさら

に驚かすら人（高階成忠女）

(2) 我が宿の松はしるしもなかりけり杉むらな

らばたづね来なまし（森染右衛門）

(1) の歌を甲心に直前には「あふことる何に

祈らん神無月」（藤原則長）直後には「あふこ

とや淡の玉の緒なるらん」（公誠）があり、こ

の三首いずれも三奏本になつて補入された歌  
である。則長は無名でこの歌以外には勅撰集  
入集歌はなく公キン誠サネは五位国防守で拾遺集に四  
首（内詞花集に一首重複）を止める作者ではある  
が、さして名のあつた歌人ではない。高階成忠  
女とは、従二位貴子。中関白道隆の室、伊国  
の母で儀同三司母とれ呼ばれた。いわゆる一流  
の貴婦人ではあるが歌人としてはさほどの人  
ではない。こうした三首を補入したのは作品  
の良否というより、意の種々相を拡大したため

のと思われ。

(2) は有名な女流衛門(赤染)の歌であり玄々集から採用したのが拾遺集の歌でもあつたと解してよい。(玄々集<sup>上</sup>所收赤染六首の中から俊賴は三奏本に二首採用している。)

◎ 茅九雑上(三首・すべて玄々集と一致)拾遺集と玄々集と一致するのは次の三首。

(1) 谷の戸を閉ぢやはてつる鳥の待つに音せで

春の暮れぬる(宇治入道前太政大臣)

(2) 思おもなきふるさとの山なれどかくれ行く

はたあはれなりけり（大江正言）

(3) 行末のしるしばかりにのこるべき松さへい

たくおいにけるかな（源道清）

さて、(1)の歌を補入したことに ついてはす

ぐ 続いて「降る雨のあしとれおつる」（大納言道

綱母）の歌あり、（後に詞花集入集）この二首は

玄々集から採用したもので、(1)は拾遺集の歌

とも重なり合っていたのである。

(2) は、玄々集・拾遺集・詞花集の三集に入集

した歌。(2)に続いて玄々集入集の「まことに  
 や人の目にはし(藤原兼房朝臣)があり、更に続  
 いて(3)の歌となる。そしてこの(3)は玄々集入  
 歌でもあり拾遺集入集の歌でもあつたわけだ  
 、このように三首いづれも玄々集から採用し  
 ようと試みたのが俊頼の意図であつたと思われる。  
 以上、俊頼の採用した拾遺集の一首ずつに  
 つき分析的にその場の位相を考えてきた。結  
 論として言えることは、拾遺集を採用するに  
 当たつてはその半数はすべて玄々集歌を通し



ての入集であつたといふことである。これら  
の中には必ずしも名歌のみが揃つているとい  
うわけではないが、よくその歌の場を考えて  
補入したのが俊賴の意圖であつたのである。

(四) 三奏本と詞花集

金葉集の充実した生新たな秋風に比して詞花  
 集になるとかなり平明な中にはかなげな詠歎  
 、 述懐などがその内容となつてくる。またそ  
 こに主要な秋人として取りあげられてゐるの  
 は曾禰好忠の十七首と最高としついで和泉式  
 部の十六首、大江匡房の十四首、俊賴は十一  
 首採用され、第四位にある。これらと考へると

金葉集が当代歌人を中心として、いに詞花  
集では後拾遺集時代の歌人達を取り入れ、  
時に金葉集時代をもこれに加え、これを調  
和させるという位置にある。本稿では詞花集  
の歌風を述べるのが目的ではなく、詞花集編  
纂の上に実は三奏本がかなり重要な資料とし  
て、これにかんづいて玄々集とも関係を有して  
おり、その問題を中心に考えてみたい。  
詞花集撰者藤原顕輔は云うまでもなく、六條  
家の姝祖顯季の子として、六條家の歌風を継承

して、いるが、題季はとくに金葉集時代の歌人  
 として、俊賴とは親交もあり、題輔が俊賴を尊  
 長して、いることも、そうした関係から、容易に  
 考えられるところである。その具体的なあら  
 われが、ここに、取りあげ、る三奏本との関係であ  
 る。三奏本と玄々集を通じての拾遺集との関  
 係について、は、すでに述べた通り、それは金葉  
 集の伝統的一面の継承でもあった。詞花集の  
 編集に、当っては、題輔は三奏本から、実に60首と  
 いう多くの歌を、採用し、その中、玄々集歌との

重複歌がこれまた40首もあるという事実はま  
ず、注意しておく伊要がある。これはいわば  
三奏本が詞花集へ発展導入された形と解され  
る。そこには玄々集の歌がおのずから採用さ  
れるという結果が生じてきているのである。

題輔が何故にかくも多く三奏本の歌を詞花  
集の中に採用したのであるうか。結論をここ

で先にいうならば、題輔は詞花集の編集にあ  
たり主題の展開と、いうことに重点をおき、そ  
の材料を三奏本に求めたといいうことである。

俊頼が三奏本改修にあたって玄々集の歌を  
 81首も採用したことに ついては俊頼の主動的  
 な態度から出たこととてあり、その中に拾遺集  
 の歌が存していたという結果になつたのであ  
 るが、顯輔は玄々集歌を始めから入集させた  
 のではなく三奏本をまづ採用することにした  
 点を置き、その中に玄々集も重複していたの  
 であり、玄々集に對する態度の上にはかなり俊  
 頼とは相違する。玄々集の歌が詞花集に入集  
 (40首)して いる数は決して少なくはな  
 いが、



題輔の以上の態度による採用歌員であつたこ  
とを忘れてはならない。次に各巻の三奏本転  
移の作者と全60首の作品について考えてみよ  
う。

○巻第一春 十二首（内、玄々集歌四首）

作者 △兼盛・好忠・赤染・道清・能宣・

長能（拾遺集歌人・六人）

△伊勢大輔・花山院（後拾遺集歌人二人）

△俊頼・源登平（金葉集歌人・二人）

△詠人しらず（一人）

以上十二首の作者は、拾遺・後拾遺歌人を

とくに重視してゐることと、おそひの特色。このう

ち二首採用してゐるのは、平兼盛の歌である。

(1) ふるさととは春めきにけりみよしのみかき

が原はかすみこめたり

(2) 佐保姫の糸そわかくる青柳を吹きなみだり

そ春の山風

この二首はいずれも天徳四年内裏歌合に出詠

の作。 (1) は詞花集構成の上からは霞を主題と

し、(2)は柳を主題とし共に重要な歌の位相を  
とめていている。題軸の採用理由は、主題の構成  
の上からであつた。

(3) 雪きえば急ぐの若菜もつむべきに春さへは

れぬみやまべの里 (曾祢好忠)

三奏守の題には「春の雪をよめろ」とある

が、詞花集には「題しらず」となつてゐる。

しかし、構成主題の点からみてすぐ次の「春

日野に朝なくきじの<sup>L</sup>(源重之)の歌と共に「若

菜<sup>L</sup>を主題としてここに配列したことが明らか

かになつてくる。

(4) よろづ代のためしに君がひかるれば子の日

の松もうらやみやせん (赤染衛内)

の一首は「子の日」の主題として採用した歌で

その必要度は高い。

(5) ふるさとのみかきの柳はるく とたがそめ

かけし浅緑ぞも (源道清)

この一首は先述した兼盛の「さほひめのしの

秋と共に柳の主題である。配列順序としては

兼盛とこの道清の秋の間に「いかなれば氷は

とくろる春風に<sup>レ</sup>（源季遠—金葉集歌人）があり、

三首を以て<sup>レ</sup>柳<sup>レ</sup>の主題歌を構成してゐる。なお

三奏本では兼盛と道清の歌は続いており、道

清の歌は玄々集から採用した一首でもあり、

詞花集ではこれを採用することにより自然と

玄々集歌をも採引的な形で入集せしめたこと

になり、玄々集歌を始めから採用したのでな

いことはいまでもない。

こころ（三奏本）

(6) 一重だにあかぬにほひをいとかしく八重か

さなれる山吹の花（藤原長能）

(7) 八重咲けるかひこそなけれ山吹の散らば一

重もあらじと思へば（詠人しらず）

この二首は、主題「山吹」の配列のため

採用した歌で (6) は寛和二年<sup>1</sup>内裏歌合<sup>2</sup>出詠の長

能で拾遺集歌人。(7) は天徳四年<sup>1</sup>麗景殿女御

歌合<sup>2</sup>の出詠。但し詠人しらずである。この

二首は<sup>1</sup>山吹<sup>2</sup>の主題歌で他には山吹の歌は

ないので構成上からは絶対に必要な歌に乏

ているのである。<sup>3</sup>三奏本から転移したのもこ

こにその理由があつた。以上七首は主題構成



の立場から詞花集には欠くべからざる歌であ  
つた。あと五首は次の通り。

(8) いにしへの奈良の都の八重櫻けふ九重に

ほひぬるかな (伊勢大輔)

山櫻(三奏寺)

(9) 櫻花手ごとに折りて歸るをば春のゆくや

人は見るらん (源登平)

藤原

(10) 櫻花風にし散らぬ物ならば思ふことなき春

にぞあらまし (大中臣能宣朝臣)

(11) わが宿の櫻なれどもちる時は心にえこそま

かせざりけれ (花山院御製)

(12)

身にかへて惜むにとまる花ならばけふや

身(三奏本)

が世のかぎりならまし(津俊頼朝臣)

この五首の中玄々集歌は(8)・(9)・(11)の三首。こ

の五首を主題構成からみるといわずれも「散る

櫻<sup>L</sup>であり、さきの七首に比してみるときその必然性は軽くなる。「散る櫻<sup>L</sup>」の主題歌はこ

の五首のみではなからである。他の歌もあ

る。玄々集からの入集も三奏本に於てすてに

入集している歌がそのまま移転したにすぎな

い。頭輔は三奏本の転移について本文の

上にも多少異同はあるが、それよりも詞書の  
 方に異同が多い。例えは俊賴の歌(12)の詞書を  
 三奏本でみると「白河の花見にまかりたりけ  
 るに、散るを見てよめる」とあるが、詞花集  
 では、ただ「櫻の花の散るを見てよめる」と  
 簡単になつてゐる。詞花集では――線を施し  
 てゐる箇所は必要ではなく、散る花であれば  
 主題に叶うてゐるのである。これは他の歌に  
 ついても云える事で、題輔は詞花集に適した詞  
 書を主体に自由に變更してゐる。それは専ら

詞花集編集上の便宜的處置によるためであつ

た。

○巻第二夏・二首（内、玄々集一首）

作者△曾根好忠・花山院（第一に改出）

(1) 宿近く花たちばなはほりうゑい昔をしのぶ

つまとなりけり（花山院御製）

(2) 杣川のいがたのこのうき枕夏は涼しきふ

しどなりけり（曾根好忠）

この二首は三奏本と本文上では全く同じで

あるが、詞書にかなりの相違がある。(1)は三

奏本では「題不知」となつてゐるが、詞花集  
 には「世をそむかせ給ひて後花橋を御覽じて  
 よませ給ひける」とある。これはすぐ前に良  
 暹法師の「さつきやみ花橋〇にふく風は〇」の  
 首と共に主題「花橋〇」と橋成してゐるためで、  
 「題不知」では意味をなさないので、さらに  
 世をそむかせ給ひて云々の作歌成立の背後事  
 情まで書き加え、花橋を表面に主題として  
 提出したたのである。そして玄々集の入集歌で  
 もあつたわけだ、ここに花も玄々集歌とい

改 め た の で あ ら う 。	複 の 面 も お て く る し 、	遺 作 者 の 歌 が あ り 、	河 辺 涼 し く よ る な み の	納 涼 と い ふ 事 を よ め る	と な つ て い る 。	を よ め る	(2) は 逆 に 三 奏 本 の 方 の	如 く 意 識 的 に 採 用 し た も の で は な い 。	う こ と は た ま ／＼ そ う な の で あ つ て 三 奏 本 の
主 題 は 「 納 涼 」 で 家 経 の	有 畧 し て 「 題 不 知 」 と	三 奏 本 の ま ま に す る と 重	（ 藤 原 家 経 朝 臣 — 後 拾	と 題 し て 「 風 子 け は	こ れ は こ の 歌 の 直 前 に 「 水 辺	詞 花 集 で は 「 題 不 知 」	の 詞 書 が 長 く 「 納 涼 の 心		

歌と好忠の歌二首を以て構成させたのである。  
ここに撰者顯輔の編集技術が働いている。  
○巻第三秋・五首（内、玄々集一首）

作者 △公任（拾遺集歌人）一人。

△花山院・伊家・堀河右大臣（後拾遺

歌人）三人。

△僧都清胤（三妻本初出の歌人）一人。

以上五人のうち花山院は既出。拾遺集、後

拾遺集時代の作者を重視し、金葉集時代の歌  
人としてほ僅か清胤一人。それらも三妻本に至



つて初出の歌人であった。作品は次の通り。

(1) 君すまばとはましものを津の園のいくたの

もりの秋の初風 (僧都清胤)

(2) 秋の夜の月に心のあくがれて雲るに物を思

ふころかな (花山院御製)

(3) 秋萩を草の枕に結ぶ夜はちかくも鹿の声を

きくかな (藤原伊家)

(4) 園こゆる人にとはざやみちのくのあだちの

まゆみもみちがしにきや (堀河右大臣)

(5)

いづかたへ秋のゆくらんわが宿に今宵はか

に(三奏本)

の(三奏本)

ナシ(三奏本)

りは雨やどりせよ(前大納言公任)

この五首の本文は強ど同じ。ただ(5)に小異

あるのみ。これに對してその詞書をみるとか

なり異同がある。(1)は三奏本秋の巻頭を飾る

一首で、三奏本の詞書には「大江馬基撰津の

侍ければ(詞)ナシ(詞)

任はててのほりける後、初秋の日遣しける

とあるが、詞花集には「津の國に住み侍りけ

る、比、しがその上にあり、傍線の如き相違がな

お、両書の間にある。ところで詞花集の巻頭歌

は好忠の「山城の鳥羽田の面を見わたせばほ  
 のかにけさぞ秋風はあくる」の一首である。こ  
 の歌を曾祢好忠集<sup>L</sup>（毎月集）にみると「はじめの  
 秋<sup>L</sup>の七月の最初に出ている。（「好忠集<sup>L</sup>が四季を  
 時間的に細分している事について）は第二章・  
 第一章・第二章に既述。）「詞花集<sup>L</sup>の好忠の秋の  
 詞書には「題不知<sup>L</sup>とある。「好忠集<sup>L</sup>にも七月の  
 最初には出ているが題はない。しかし題輔が  
 好忠の秋を巻頭に置いたのはこの一首が初秋  
 の歌であったからに外ならぬ。題輔はこの秋

に連接して清胤の歌を配置させ二首合伴で初秋の主題を決定したのである。

(2) は、主題「秋」の月十三首の最後に位置した花山院御製。秋の景物の代表の「月」の歌が多いのは当然であるが、それだけに主題との結びつきは弱くなる。花山院の御製と最後に配置させたこととは、この歌が悲劇の帝王としての花であり、今時に致、が、ら、も、お、お、ら、か、で、あ、る、と、こ、ろ、か、ら、棄、て、ま、れ、ず、に、三、卷、本、か、ら、転、移、さ、せ、た、も、の、よ、う、で、あ、る、。

(3) の歌の主題は鹿である。これは三奏本の詞書に  
 旅宿<sup>レ</sup>鹿<sup>レ</sup>といへることをよめら<sup>レ</sup>とあることであ  
 明ら<sup>レ</sup>ムだが、詞花集には「題し<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ず<sup>レ</sup>」となつ  
 てい<sup>レ</sup>る。これは直前に出羽(後拾遺集歌人)の「  
 きく人のな<sup>レ</sup>びやす<sup>レ</sup>からぬ鹿<sup>レ</sup>のねは<sup>レ</sup>……」の一首が  
 あり、鹿主題歌はこの二首のみで構成されて  
 いるにも拘らず出羽の歌の詞書にも「永承五  
 年一宮歌合によ<sup>レ</sup>わ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>」とあり、鹿の詞は全<sup>レ</sup>  
 くない。これはおそろく歌の中に鹿を詠<sup>レ</sup>んでい  
 るし、わざと詞書に鹿の字を用<sup>レ</sup>いる必要も

ないとい題輔は思つたのであろうか。さらに続  
いて(3)の歌にも三奏本の詞書を省略して「題  
しらず」とした。従つてこの二首は歌によつ  
てのみ鹿主題といふことゝがわかるのであつて、  
詞書の表面には全く鹿は出て来ないといふ結  
果になつてしまつた。このことは本歌によつ  
て鹿といふこととはわかりもするが、編集とし  
ては決してよいとはいへない。先の巻第二夏  
の好忠の歌にも「題不知」の例はあつたが、  
この場合はそれともやや田舎なつているので

ある。(好忠の場合は、その直前に主題が提出されていろ。)

(4)の主題は「紅葉」<sup>し</sup>。八首から構成されその最初に三奏本から転移された堀河右大臣の歌で

ある。この歌は安達原の紅葉を想像した作で

「見<sup>二</sup>行客<sup>一</sup>し」と題詞にある如く作者自身紅葉を

見ているのではなく旅人に紅葉を、しかも有

名な安達原のまゆみの紅葉のこゝを向いたい

といふのであつて、以下紅葉の種々相を詠人

が歌へと展開してゆく。その配列として最初



に位置していろのも適当である。玄々集に入  
集の歌は五首中本歌のみ。これも特別に玄々  
集歌であるから採用したのではなく、たまた  
ま三奏本から採用したこの歌が玄々集にも入  
集していったというにすぎぬ。

(5) は三奏本に放ても「雨中秋尽」といへること  
よめる<sup>し</sup>とあつて秋の最尾の主題であること  
はいうまでもなく、題輔は三奏本からそのま  
ゝ詞花集に転移させたのである。しかも作者  
も名のある大納言公任であり、九月<sup>し</sup>の歌と

してはまことにふさわしい歌であつたわけだ

ある。尚、本文に小異があるが、「公任卿集」

には「いづかたに、今宵ばかりは」とある。

また詞書は「九月晦日の日秋の風は雨の中に

つきぬといふ」となつており、三奏本、詞

花集はそれぞれ少し変えてとつている。

○巻第四冬・六首（凡て玄々集と一致）

作者△嘉言・長能・和泉式部（拾遺集歌人・三人）

△道雅・義忠（後拾遺集歌人・二人）

この巻に於ても翌輔は拾遺・後拾遺の歌人

を重要視していろ。六首次の通り。

(1) 山深みおちてつもれる紅葉ばのかわける上

に時雨ふるなり (大江嘉言)

(2) もろとも山めぐりする時雨かなふるにか

ひなき身とほしらずや (左京大夫道雅)

(3) あられふるかたのゝみのゝかり衣ぬれぬ宿

かす人しなければ (藤原長能)

(4) 年をとへて吉野の山に見なれたる目にめぐら

しきけさのしら雪 (世ぬ(三妻本) はつ(三妻本))

(藤原義忠朝臣)

もふり

(5) ひぐらしに山路の昨日しぐれしは富士の高

嶺の雪にぞありける (大江嘉言)

(6) 待つ人の今もきたらばいかげん踏まゝく

惜しき度の雪かな (和泉式部)

本文の上には(4)が三奏本と相違している外

は全く同じ。詞花集に「目にめづらしき」と

あるが、三奏本(尾遠本)とみると「メニメツ

ラシ」と右傍に校異の書入れありこれによつ

たものであろう。六首とも玄々集に一致して

いるのは「冬部」の特色で、これまでの各巻

と異なる。冬部の歌数は僅か廿一首。その中に六首も三奏本から転移させそれが凡て玄々集歌と一致している点、題輔はこの冬の巻では玄々集と重複した三奏本の歌のみを採用する方針をとつたようである。

(1) の主題は「落葉」であり、落葉構成の歌は全部で五首。その中の一首と云うことになる。平明な嘉言の歌は題輔好みの歌であつたであらう。詞書に「題不知」とあるのも三奏本のままである。

(2) の歌は主題が「時雨」で、すぐ次の「膽西上人」の「

庵さすならの木陰に……」の二首で構成されてい

る。この歌の詞書は詞花集では「東山ナレ(三奏本)に百寺

をみけるに時雨しければよめる」とあり、

傍線の個所三奏本にない。時雨の主題は僅か

二首であり、道雅の歌を三奏本から転移せし

めたのも主題構成のため以外ならぬ。

(3) の歌の主題は「鷹狩」レ。しかも「鷹狩」の主題

はこの歌一首のみでその位置は極めて重い。

この歌がなければ詞花集には「鷹狩」の主題

を欠如することになるからである。三奏本に  
 は長能の鷹狩の歌は二首続いて採用されてい  
 る。<sup>他の一首</sup>（み狩する末野にたてる一つ松とがへる鷹  
 のこひにかもせむ）。しかし、(3)の歌は玄々集  
 にも採られ、歌としてこの方が秀れている。た  
 ので題輔は詞花集に採用したものと思われる。  
 三奏本をみると(3)の歌の前に道清の「ぬれ  
 くもなほ狩りゆかむはし鷹の……」の一首があ  
 り、この歌に「雪中鷹狩をよめる」という詞  
 書があり、以下長能二首、越後の「ことわり



や交野の小野に鳴く雉子……の一首には詞書は

全くなく、道清の詞書を以てここの四首は統

一されていゝる。顯輔が(3)を詞花集採用に當つ

ては「鷹狩を讀る」と改めて自分で詞書をつ

けて編集したのである。

(4)・(5)・(6) 三首はいずれも雪の主題の中に配さ

れた歌。雪主題の歌は詞花集では六首ある。

ところ、(5)の歌を三奏本でみると、(1)と

連接して「時雨」の主題歌になつていゝる。歌

の内容として「時雨」にもなり得る。しか

し、題輔が詞花集に採用するに当つては下句  
の雪の言葉を生かして、時雨の歌から分離し  
て「雪」の主題の下に改編するといふ方法を  
とつている。主題を分離してまで採用したの  
は、もとより嘉言の歌を佳しとした題輔の趣  
向によるものであろうが、玄々集に入集してい  
たとはいふ理由もこの冬の巻については考えら  
れる。

(4) の詞書は、三奏本ではただ「初雪をよめ  
る」のみあるが、詞花集では更に詳しく、

その上部に「大和守にて侍ける時入道前太政  
 大臣のもとにて」といいう背景を語つた文章が添  
 加されてゐる。そして雪の主題構成の上から  
 (4) (5) は初雪の情景を (6) の和泉式部の歌は降、  
 り、續つたた庭の雪の情景を配し雪の全貌を設定  
 したのである。三奏本に於ける (6) の詞書には  
 「庭雪をよめる」とあるが、詞花集ではすく  
 前に忠通の「くれなゐに見えし梢も雪ふれば  
 ……」の一首があり、これに「雪中眺望」の詞  
 書が附してゐるため「題しらず」といふ詞書

になつてしまつた。

○卷才五賀・三首（内、玄々集一首）

作者 △惠慶法師（拾遺集歌人・一人）

△入道前太政大臣（頼通）・後冷泉院御

製（後拾遺集歌人・二人）

三首の歌は次の通り。

(1) 君が代にあぶくま川の底清み千年をへつゝ

代々をかさねて（三奏）

すまんとぞ思ふ（入前前太政大臣）

(2) 長浜の真砂の敷もなにならじつきせず見ゆ

る君が御代かな（後冷泉院御製）

(3) 誰にとかか池(三奏本)の心も思ふらんそこにやどれろ

松のちとせを (惠慶法師)

このうち (1) は三奏本で第二位に配置され

ていたのと詞花集では賀の巻頭に据えられた

頼通の歌であり、今時にこの一首のみが玄々

集歌でもあつた。(2) は俊頼も初奏本(伝冷泉

為相等本)以来三奏本まで全く削除されなかつ

た歌であり、後冷泉院御製でもあり長洪の真

砂を主題とした歌はすぐ前の松島の磯を主題

とした歌「松島の磯にむれぬる」(清原元輔)

とも対照的になるところから題輔は(2)を三奏本から転移させたものと思われる。

(3)の歌を三奏本から採用したことに ついて はすでに松田武夫博士が指摘されて いる如く

〔詞花集の研究<sup>L</sup> P.77〕「松<sup>L</sup>〔待つ〕の掛詞の修辭を

中心として主題の展開したた四首一群を配置した意図が働いていたと解される。(3)の直前

には公任の

(A) 一とせと暮れぬと何か惜しむべきつきせぬ

千世の春を待つには

首 は 一 団 を 形 成 し そ の 底 に は 松 が 強 い 連 続 の	賀 の 歌 の 構 成 と し て は 連 脈 を も ち つ つ こ の 四	い 松 に 發 展 し 目 出 度 い 歌 と し て 終 る の で あ る。	連 接 し 、 さ ら に (3) の 松 は (B) ・ (C) の 住 吉 の 久 し	の 二 首 が 続 き 賀 の 巻 は 終 る。 (A) と (3) は 掛 詞 で	ひ か は ら ら ん  (大 細 言 經 信)	(C) 住 吉 の あ ら 人 神 の 久 し さ に 松 も い く た び お	け ん 住 吉 の 松  (読 人 し ら ず)	(B) 君 が よ の 久 し か る べ き た め し に や 神 も う ゑ	の 一 首 が あ り 、 (3) の あ と に は
--	--	---	--	--	---	--	---	--	---



主題となつてゐるのである。こゝした構成はまた加賀といふ巻の特殊な伝統手法による組織であつた。尚、本文には(1)と(3)に小異があり、詞書にはかなりの相違がある。これは例の如く顕輔がその編集に當つて適宜自由に改めたものである。

○卷茅六別・五首（凡て玄々集と一致）

作者 △和泉式部（拾遺集歌人・一人）

△一條院皇后定子・寂照法師・藤原輔

尹（後拾遺集歌人・三人）

△民部内侍（金葉集歌人・一人）

この巻に於ても頭輔は拾遺集・後拾遺歌人を重視してゐる。今時に茅四冬の歌の場合におけると同様玄々集の重複歌のみを採用してゐる。がその特色である。作品次の通り。

(1) 都にておぼつかなきさをならほずはたびねを

いかに思ひやらまし（民部内侍）

(2) もろともにならまし物そみちのくの衣の園

をよそにきくかな

（和泉式部）

(3) とまりぬて待つべき身こそ老いにけれあは

れ別は人のためかは (藤原輔尹朝臣)

しのぶ(三奏)

(4) 茜さす日にむかひても思ひ出よ都は晴れぬ

ながめすらんと (一條院皇后宮)

(5) といまらんとどまらじとも思ほえずいづく

もつひのすみかならねば (寂照法師)

僅か「別」の歌十五首の中に三奏本(今時

にすべて玄々集所収歌)から五首も採用して

いる。  
1/3に当たると。詞書には例によりかなり

の相違があるが本文には僅か(4)に小異がある

のみ。歌の配列上特に目立つことは(1)の歌が  
 三奏本では十三番目(全歌25首中ほぼ中位)に  
 位置していたのを巻頭に転移させたことであ  
 る。そして三奏本四番目の和泉式部の歌と第  
 二位に据え女流の作品二首を連接させる方法  
 をとつた。三奏本の歌を巻頭に持つてきたの  
 は先の賀に於て頼通の例がある。しかし歌人  
 としても余り名の知れていない金葉集歌人、  
 それも三奏本のみになを列ねた民部内侍を巻  
 頭に持つてきたのはこうした平明な歌を好人

だ 題 輔 の 嗜 好 に 通 っ て いた から であ ろ う 。 和  
泉 式 部 の 歌 を 連 接 さ せ た の も そ の 歌 が ら に よ  
る た め であ っ た と 思 わ れ る 。

(3) は 三 奏 本 だ け は 菅 原 資 忠 <sup>モト</sup> の 歌 と な っ て いる

が ( ) し かし 為 遠 本 に は <sup>別に</sup> 藤 輔 伊 <sup>レ</sup> の 名 を も 出 げ

て いる 。 ) 題 輔 は 詞 花 集 に 記 して は 藤 原 輔 尹 朝

臣 <sup>レ</sup> と は つ き り 名 を 改 め て いる 。 こ れ に よ る

べ き であ る 。 輔 尹 は 詩 名 の 方 が む し ろ 高 く 大

江 匡 房 に よ っ て 其 の 才 を 称 せ ら れ た 人 。 し か

し 題 輔 は (3) の 様 な に 境 を 詠 じ た 歌 を 好 ん で いる

たのである。

(4) は枕草子二四〇段にある歌。皇后の御乳

母大輔の命婦が日向へ下る時扇に書かれて別

離を惜しみ給うた皇后の御歌で、  
「さる君(注

皇后のこと)を見おきたてまつりてこそえ行く

まじけれ。  
と感銘を残したことを枕草子は伝

えている。詞花集ではこの歌の直前に津守国

基が大宰府に下る大納言と別るる歌「六とせ

にぞ君はきまさん住吉のしがあり、  
二首とも九

州と関係ある別離の歌を並べているのである。

(5) は三奏本における只一首の僧の歌である。ところが詞花集には五首もあり、その配列位置は後の方にまとめられているのがその特色である。従つて三奏本から只一首の寂照法師の歌を転移し一群の僧の別離歌を構成するのが題の金葉集に比して詞花集は歌数もぐつと減じている。別離の歌にしても三奏本の25首が詞花集では15首になつており、題輔は手許に用意してある。10首はあつたがこれでは余りにも



少ないので残り5首を三巻本から玄々集と重複している温雅な歌を補充採用し、これを題輔自身の配列基準で構成したのが巻第六であつたといふことが出来る。詞書の異同は、これまでと同様そこへ起つた題輔自身の編集によるものであつた。

○巻第七 志上・五首（内、玄々集歌四首）

作者 △実方・祐挙・道信（拾遺集歌人・三人）

△道綱（後拾遺集歌人・一人）

△関白前太政大臣（藤原忠通）（金葉集歌人・一人）

以上五首の歌は次の通り。

(1) あやしくもわがみ山木のもゆるかなおもひ

は人につけてしものを  
(南白前太政大臣)

(2) いかでかは思ひ有ともしは(三妻本)しらすべき室の八島

の煙ならでは  
(藤原実方朝臣)

(3) 七夕にけさひく糸の露をおもみたわむけし

きを見でやくみなん  
(大納言道綱)

(4) おねは富士袖は清見が園なれや煙も波もた

うぬ日ぞなき

(平祐季)

(5) 嬉しさはいかばかりかと思ふらんうきは身

にしむ物にぞ有ける (藤原道信朝臣)

こゝにも拾遺・後拾遺の歌人を重視してい

る。金葉集歌人は忠通の(1)の歌のみで他はす

べて玄々集とも一致しており、この巻も玄々

集を重要視したのが特色といえる。

ところでは(1)は巻第七(恋上)の巻頭歌であ

る。しかし三巻本では(1)は巻第八(恋下)に所収

の歌であり、顯輔は詞花集編集に當つて金葉集

歌人忠通の歌に敬意を表わして巻頭に移動さ



(2) ととも同じ「思ひへ火」の語によりさうにこ

の二首は緊密に結びついていゝるといふことに

なるのである。

(3) 以下の歌は、連接の形ではなくほつん

と前にその歌の趣向の面白さから挿入された

ものである。本文の相違は(2)に小異がある外

他はすべて同じ。但し、例の如く詞書にはか

なりの相違がめだつ。例えば(2)を三巻本でみ

ると「はじめたる人のもとにつかはしける」

とあり、(4) (5) は二首とも同じ「女のがりつかは

しける<sup>レ</sup>といふ題詞になつてゐるが、詞花集  
の(4)では「題しらず<sup>レ</sup>、(5)は「女をうらみてよ  
める<sup>レ</sup>と改変してゐる。題輔はこれらの歌を  
その前の歌との関連に於て自由に改めたので  
ある。

○巻茅八恋下・二首（内二首とも玄々集の歌）

作者 △公誠（拾遺集歌人・一人）

△相模（後拾遺集歌人・一人）

この巻もまた拾遺・後拾遺の歌人を重視し

てゐる。二首は次の通り。

(1) あふ事や涙の玉の緒なるらんしばしたゆれ

ば落ちてみだるゝ (平公誠キニリネ)

(2) 夕暮は待たれしものを今はただ行くらん方

を思ひこそやれ (相模)

三奏本で(1)をみると題詞はいずれも「題不

知<sup>し</sup>とあり詞花集と同じであるが三奏本では

作者に「平<sup>し</sup>がない。(2)は三奏本では巻第七

巻上にあるが詞花集では令離して巻八に移動

させている。三奏本の詞書には「人を恨みて

よめろ<sup>し</sup>とあるが詞花集には「大江公資に忘



られてよめる<sup>レ</sup>とより具体的に記してある。  
 二首ともし玄々集所収の三奏本の歌をそのま  
 ゝ採用した形になつてゐる。歌そのものにつ  
 いていへば(1)は逢う恋が主題で「あふ事<sup>レ</sup>は  
 「涙の玉の緒<sup>レ</sup>とみたてた趣向に面白さがあ  
 り。(2)は忘れられ、恋が主題。無名抄「代々  
 恋歌秀歌事<sup>レ</sup>の項の最初にも挙げられた歌で  
 題輔が後拾遺のおもて歌(代表的秀歌)とした  
 とあるが、後拾遺とあるのは勿論誤り。しか  
 し題輔が称賛した歌であつたことは知られる。

三奏本からこの歌を採用したのも顕輔好みの歌であつた為である。

○卷第九雑上・十六首（内、玄々集歌十二首）

作者 △道綱母・中務御具平親王・和泉式部

・道清（拾遺集歌人・四人）

△花山院・小式部内侍・橘為義・中原

長国・清少納言・江侍従・相模・出

羽井（後拾遺集歌人・八人）

△俊頼・律師清慶（金葉集歌人・二人）

この巻に於ては拾遺・後拾遺歌人を重視し

て  
い  
る  
。  
十  
六  
首  
の  
歌  
は  
次  
の  
通  
り  
。

(1) 須磨の浦にやく塩がまの煙こそ春に知られ

塩やくがま(三奏亭)

ぬ霞なりけれ  
(源俊賴朝臣)

(2) 木のもとを栖とすればおのづから花見る人

になりぬべきかな  
(花山院御製)

(3) 春の来ぬ所はなきを白河のわたりにのみや

花は咲くらん  
(十式部内侍)

(4) 誰かこの数はさだめしわれはたいとへとぞ

思ふ山吹の花

(大納言道綱母)

(5) 思ひいでてもなくてやわが身やみなまし姨捨

山の月見ざりせば  
 (律師清慶)

(6) 君待つと山の端いでて山の端に入るまで月

をながめつるか  
 (橋為義朝臣)

(7) こゝろみにほかの月をい見てしがなわが宿

からのあはれなるかと  
 (花山院御製)

(8) 恨めしく帰りけるかな月夜には来ぬ人をた

に待つとこそ聞け  
 (中務卿具平親王)

(9) 月にこそ音の事は覚えけれ我を忘るゝ人に

見せばや  
 (中原長国)

(10) 人 知れずもの思ふことばならむにき花にわ

かれぬ春しなければ (和泉式部)

(11) よしさらばつらさは我にならひけり頼めて

来ぬは誰か教へし (清少納言)

(12) かづきけん袂は雨にいかゞせし濡るらはさ

ても思ひ知れかし (江侍従)

(13) 住吉のほそ江にさせるみをつくし深きにま

けぬ人はあらじな (相模)

(14) 降る雨のあしとも落つる涙かなこまかにも

のを思ひくたけば (大納言道綱母)

(15) 忍ぶるも苦しかりけり数ならぬ身人(三巻本)には湊の

なからましかば (出羽弁)

(16) 思ひかね別れし野辺にきてみれば浅茅が厚

に秋風ぞ吹く (源道清)

以上十六首の中玄々集所收の歌は (1)、(3)、(13)、(14)

の四首を除くあと十二首全部である。三巻本

と本文との相違は僅かに (1) と (15) に小異あるの

みだが詞書には例の如くかなりの相異と見出

だす。それよりこの巻の顕著なる特色は三

巻本から詞花集に採用するに当つて (1) と (14) は

同じ雑歌からの転移であるがその他の歌はすべて他の部立から採用していきうことである。これを表示すると次の通り。

三奏本所収各部立	卷第一 春歌から採用	卷第三 秋歌から	卷第六 別離から	卷第七 恋上から	卷第八 恋下から
	↓	↓	↓	↓	↓
詞花集雑上の歌	(2) .	(5) (7) .	(10)	(6) .	(11) .
	(3) .	(8) (9) .		(15)	(12) .
	(4)	(16)			(13)



こ  
う  
し  
た  
転  
移  
採  
用  
は  
何  
を  
意  
味  
す  
る  
か  
と  
い  
う

と、  
そ  
も  
く  
「雑歌」  
と  
い  
う  
歌  
は  
四  
季、  
別  
離、  
恋

な  
ど  
の  
文  
字  
通  
り  
雑  
多  
な  
歌  
を  
も  
含  
み  
得  
る  
性  
質  
と

有  
し  
て  
い  
る  
と  
い  
う  
事  
で  
あ  
る。  
題  
輔  
は  
三  
奏  
本  
の

歌  
を  
詞  
花  
集  
に  
採  
用  
す  
る  
に  
あ  
つ  
て  
は  
三  
奏  
本  
の  
各

部  
立  
か  
ら  
自  
由  
に  
雑  
歌  
と  
も  
な  
り  
得  
る  
歌  
を  
適  
当  
に

転  
移  
改  
変  
し  
た  
の  
で  
あ  
る。

さ  
て、  
(1) は  
俊  
賴  
の  
歌  
で  
詞  
花  
集  
雑  
上  
の  
第  
二  
位

に  
配  
列  
さ  
れ  
た  
「霞」  
主  
題  
「歌」  
で  
あ  
る。  
卷  
頭  
は  
源  
賴  
家

の  
「春」  
が  
す  
み  
か  
す  
み  
し  
方  
や  
津  
の  
園  
の  
ほ  
の  
見  
し

ま江のわたりなるらん<sup>し</sup>という三島江の春霞を  
主題としたもので、それにふさわしい歌は須、  
磨の春霞を主題とした俊賴の歌であつた。  
これは三奏本には二句「塩やくかま<sup>し</sup>となつてい  
るが、散木集には詞花集と同様「やく塩がま  
の<sup>し</sup>とある。因みに牙三位も俊賴の「なみたて  
る松のしづえをくもにてかすみわたれる天  
の橋立<sup>し</sup>の歌で、この三首を以て詞花集は主題  
「霞<sup>し</sup>の歌を形成し、中二首まで俊賴の歌。  
巻頭には配置されなかつたが詞花集における

れ も 題 輔 好 み の 温 雅 な 作 品 で あ る の か そ の 特	み が 金 葉 集 歌 で 他 は 拾 遺 ・ 後 拾 遺 の 歌 。 い ず	て の 月 を 五 首 配 列 し た の で あ る 。 清 慶 の (5) の	雑 歌 の 構 成 上 春 の 景 物 に つ い て 秋 の 景 物 と し	(5) か ら (9) ま で の 主 題 歌 は 秋 の 月 で 題 輔 は	で そ の 位 置 は 重 要 で あ る 。	大 納 言 道 綱 母 の 歌 は た た 一 首 の 山 吹 の 主 題 歌	(3) 十 式 部 内 侍 の 歌 は 櫻 の 主 題 歌 で あ る が (4)	一 春 歌 か ら の 採 用 。 そ の 中 、 (2) 花 山 院 御 製 、	俊 賴 の 歌 は 重 い 。 (2) (3) (4) は い ず れ も 三 奏 本 第
--	--	--	--	--	--	--	---	--	--

色といえる。但し、このうち(6)は三奏本恋上  
 からの転移で三奏本の詞書には「月のあか  
 りける夜、人と待ちかかてつかはしける」とあ  
 るが詞花集では「題不知」と改変している。  
 尤も「題不知」としているのは恋の歌に限  
 ったことではなく(5)(7)もそうである。(三奏本  
 では(5)「山月をよめる」(7)「清涼殿にて月を  
 御覽じてよませ給へる」とある。)ところが、  
 は逆に三奏本に「月夜にまかりたりける人々の」と  
 抽象的記述になつている所を詞花集では「月

のあかく侍けり夜、前、大納言公任、まうできた  
 りけるを、する事侍りて……とあり具体的にな  
 っており、以下の記述も三奏本よりは委しく  
 なつていゝる。  
 次に(10)から(15)まではいづれも恋の歌である。  
 部立からみると(10)は三奏本の別離歌に所収さ  
 れていゝるが詞書には「保昌に忘れて後、兼  
 房がとぶらひ侍りけれは」とあり、明らかに恋  
 の歌。(14)はすでに述べた如く三奏本の雑上所  
 収の歌であるが、これまた詞書には「思ふこ

と侍りける頃、雨の降るを見てとあり、かげろふの日記とみると長精進を思い立つた頃、雨の降る日暮家を恨んでの恋の歌となつてゐる。かくの如くこの六首は、月の主題につづく恋の主題であり、(16)は三奏本では秋歌に所収。詞書は「長恨秋の心をよめる」となつており、(詞花集の詞書全く同じ)いわゆる「速懐」の歌である。題輔は三奏本の「秋の歌を詞花集」に「<sup>上</sup>に改変挿入したのであつた。かく考へてくる」と「<sup>上</sup>」の編集にあつたのは極めて自由

な態度で顕輔は自己の好きな歌をこの巻に編入させているのであり、先にも述べた通り、そうした融通のきくのが雑の歌であつた。このことは次の「雑下」の歌にいいとも言えるのである。

○卷茅十雑下・四首（すべて玄々集歌と一致）

作者 △増基法師（後撰集歌人・一人）

△好忠（拾遺集歌人・一人）

△家経・正言（後拾遺歌人・二人）

この巻も同じく拾遺・後拾遺歌人を重視し



ていゝる。ただ後撰集歌人増基法師まで採用し  
ていゝるのがこの巻の特色であるが、これも玄  
々集所載という三巻本にもとく依るところ  
のもので、顯輔自身が特に後撰集歌人を採用す  
るといふ意識はなかつたように思われる。つ  
まり三巻本に依存した結果にすぎない。  
四首は次の通り。

(1) あが思ふことのしげきにくらぶれば信田の

森の千枝はものかは（増基法師）

(2) みなかみのさだめてければ君が代にふたた

びすめるほり川の水（曾祢好忠）

(3) 風趣の峯の上にて見る時は雲はふもとのも

のにぞありける（藤原家経朝臣）

(4) 思ひ出もなきふる里の山なれどかく木行く

はたあはれなりけり（大江正言）

四首ともすべて玄々集所載の歌である。歌

の本文は三奏本と全く同じであるが詞書には

例のごとく異同が多い。

さて、(1)の歌は三奏本第八恋下所収の歌で

詞書には「女のもとへつかはしける」とある  
が、題輔はこれを詞花集雑下に改変採用し、  
詞書も前後の肉像により「題不知」と改めた  
のである。その直前の歌は、  
○この身をば空しきものとしりぬればつみえ  
んこともあらじとぞ思ふ（読人しらす）  
の一首で、直後には、  
○網代には沈む水屑もなかりけり宇治のわた  
りに我やすまゝし（大江以言）  
の一首があり、この二首をみるといわずれもわ

が身の沈淪を嘆いた述懐歌である。この間に増基法師の歌を配列するには志の詞書ではそぐわないのであつて、題輔が「題不知」と改めたのは理由のあることであつた。歌も志の歌としてではなく物思う述懐の歌として採用したのである。さすればこの三首は雑の述懐歌として都合よく連接するのである。

(2) の好忠の歌は三麦本では賀の巻に収録されて、いゝるが詞花集では雑下に転移採用した。しかもその配置とみると、家経と題輔の大

嘗会主基と悠紀の屏風賀秋の次にあり三首一  
 体となつて同じく賀の秋を形成してゐること  
 になるのである。この配列もなか／＼流れは  
 よい。  
 (3) の家経の秋は三巻本では同じく巻九雑上  
 の秋に収録されており、その詞書は「みかさ  
 てよめろ」が詞花集では「風越の峯にてよめろ」  
 となつてゐるだけの相違で配列としては明ら  
 かに蜀旅であるのも三巻本、詞花集ともに同  
 じ。

(4) の大江正言の歌も三巻本では巻九雑上に所収。その詞書には「ふるさとを恨むる事ありて別れける時、河尻の程にてよめる」とある。如く「別れの歌である。詞花集では「内大臣はりまへまかりけるともにて、川尻をいづる日、読るとなつておりかなり異同はあるが、」

本の如く「別れける時」の語はなかくとも同じく「別れの歌として採用した歌であることはいはれか、で殊に詞花集に於て「別の歌はこの

歌一首だけでこの歌を採用したことは重い意味を有していたのである。

### 結論

以上、三奏本から詞花集に転移採用した全60首を各巻別にその位相を考えてきた。拾遺集から三奏本に採用した21首に比すとその歌数は、はるかに多い。この事は金葉三奏本の詞花集に及ぼした影響としてまづ考えるべき大切な問題である。また玄々集との関係についてみるとその重複歌は40首にも及び、これ



また拾遺集の重複歌11首に比してはるかに多くその比は実に67%にも達する。特に玄々集を意識して三奏本を採用したのは冬(6首)、別(5首)、恋下(2首)、雑下(4首)の巻で凡て一致重複してゐる。ついで恋上、雑上が多く夏、春、賀、秋の順。(但し、春・賀は33%の同じ比。茅四節(二)の表参照)四季の巻では春、秋などは必ずしも玄々集の歌は意識してゐない。賀の巻も同じ。しかし全般的にみえる時、題輔はやはり三奏本と玄々集歌との一致の歌を詞花集に

採用したといふことが結論としては指摘出来るのである。

次に三奏本から詞花集に転移採用するに当つての頭輔の撰歌態度としては、

(一) 拾遺・後拾遺歌人を重視したこと。

拾遺集歌人十六人。歌数二十四首。

後拾遺集歌人廿一人。歌数二十五首。

とりわけ、右のうち歌数の多いのは拾遺集

にあつては三首採用の好忠・和泉式部。二首

採用の兼盛・道濟・長能であつた。(その他は

一首)、後拾遺歌人にあつては花山院の四首が  
 最高。ついで相模の二首。(他はすべて一首)  
 右のこゝから採用歌人数は後拾遺の方が多  
 いが、實質的には拾遺集歌人の方に採用歌数  
 の多い作家を配列せしめてゐることか特色で  
 ある。  
 (二)、歌を転写するに當つては、歌の本文その  
 ものには強ど変更を加えなかつたが、詞書  
 には題輔の自由裁量でかなりの変更を加え  
 てゐること。

(三) 採用された歌は、いずれも顯輔好みの平

明温雅なものが多く、それらの歌がそれごとく  
の主題に従つて配列されたこと。

(四) 雑の歌は、その歌の性質上三奏本におけ

る他の部立から自由に転移させていること。

(五) 三奏本を採用したとはいえ、金葉集時代

の歌人は僅か六人八首。俊賴の歌も二首の

採用にすぎず、軽く取り扱つたこと。

以上のことを結論として三奏本と詞花集の

関係について考察を終る。

### 第三章 金葉集の歌風

改修すること三度。三巻本によつて白河院  
 の始めて御嘉納された金葉集の改訂事業は俊  
 頼にとつてもホナリ負担の重いものとなつた  
 に違ひない。かくして完成された三巻本こそ  
 真の意味の金葉集であるべき筈なのに一般の  
 流布本は二度本であつた。白河院・俊頼の庶  
 幾されたのはいうまでもなく三巻本であつた。

金葉集の歌風といふのも正しくは三奏本に  
於けるそれであるべきである。

二度本にあつて三奏本で削除された歌が凡  
そ、217首ほどに及び、三奏本に新たに採用され  
た玄々集の81首、拾遺集からの21首などは二  
度本とはかなり内容的に相違するものであり、  
革新歌人俊賴はもとより白河院におかれて  
も当代を尊重する態度には変りがなかつた、そ  
れでも玄々集など前期の歌集、或いは拾遺集  
にしても玄々集の数に比すれば少ないが、そ

れでも時代としてには古い。しつとりした静寂  
 美を包んだ詠嘆的情趣を多分に有しているこ  
 とも一方には否定出来ないところである。  
 にもかゝわらずやはり金葉集時代を形成し  
 ていることもまた事実である。それは俊賴自  
 身の撰歌意識につらなるもので、具体的にい  
 えば(一)初度本の復活歌、(二)三奏本に於て新た  
 に入集した歌、(三)初度本以来三奏本までの不  
 動の歌などの再編成の中には、二度本までに  
 はみられぬ新しい複合的又新しい美しい美が全体的に融



和した形に於て、いわゆる金葉集の歌風がそこ  
 に現出してくるのである。古来風侍抄には  
 「金葉集は撰者のさほどの歌人に侍れば、  
 歌どももみなよろしく侍るを、すこし時  
 の花ををる心のすゝみけるにや、當時の  
 人のみはじめよりつかきたちたるやうに  
 て、いかにぞ見え侍るなるべし。  
 (日本歌学大系 本による)

と金葉集の歌風を評して、また、「無名抄  
 には、  
 「金葉集は又あざとまかしかからむと、して、

軽<sup>きやうく</sup>やかなる歌多かり。詞花・千載、大略後拾

道の風なるべし。<sup>L</sup>（『日本古典文学大系本<sup>L</sup>による』）

とあり、端的な批評といふべきであらう。以

下具体的に主な歌のみをあげ金葉集の歌風の

根源を分析してみよう。

(一) 初度本の復活歌（31首あり）

(1) ふるさととは春めきにけりみ吉野のみかきの

原も霞こめたり（春・平兼盛）

(2) 白妙の雪降りやまね梅が枝に今ぞ鶯春と鳴

く  
なる

（春・全）

(3) 雪消えはゑぐの若菜も摘むべきに春さへ晴

れぬみ山辺の里 ( 〃 ・ 曾根好忠 )

(4) 一重だにあかね心をいとゞしく八重かさな

れる山吹の花 ( 〃 ・ 藤原長能 )

(5) 花だにも散うでわかるく春なればいとかく

けふををしまざらまし ( 〃 ・ 中納言朝忠 )

(6) 夏草の中を露けみかきわけて刈る人なしに

繁る野辺かな ( 夏 ・ 壬生忠見 )

(7) 有明の月はたもとにながれつゝ悲しき頃の

蟲の声かな ( 秋 ・ 赤染 )

(8) さをしかの鳴く音は野辺に聞ゆれど淡は麻

の物にざりける (リ・源俊頼朝臣)

(9) いづかたに秋のゆくらむわが宿に今宵ほか

りの雨宿せよ (リ・大納言公任)

(10) 深山木を朝な夕なにこりつみて寒さをこふ

る小野の炭焼 (冬・曾祢好忠)

以上僅か十首の例であるが大体的傾向は明

らかである。この中 (1)・(2)・(5) はいずれも

天徳内裡歌合<sup>7</sup>の作品でここには拳げなかつた

が順能宣<sup>8</sup>の天徳内裡歌合<sup>9</sup>の歌もある。

(4)は、寛和二年「花山院歌合」の歌。その他古い  
 歌人では(6)の忠見も朝忠(5)と全しく後撰集時  
 代であり、また赤染(7)、公任(9)、長能(4)など  
 拾遺集時代の歌をみるといわずれも何かもの寂  
 びた優美な歌である。同じ拾遺集歌人でも好  
 忠の(3)、(10)にはまだ彼の本領は出ていないが  
 やはり彼らしい叙景的素地がみられる。当代  
 としては撰者自身の(8)の如き歌には趣向的な  
 ものがみられる。要するにこれら十首には斬  
 新的内容には乏しく寂かな詠嘆的陰影が漂う

ているのが特色で、復頼は、初度本の復活をこの  
 ような形に於て三奏本の一面を表現しよう  
 としたのである。(初度本伝為相本は巻六以下  
 は欠巻で文献としては巻五までしか三奏本復  
 活歌は知られない。)

(二)、三奏本の新入歌

三奏本になつて新たに採用した歌こそ実は  
 三奏本としての特質を明らかにした点、(一)上

りも積極的要素を加味した結果をもたらしただ。  
玄々集81首がそれであり前に詳しく説明した  
通りである。ここではそれらの主要な歌につ  
いて内容的に考えてみよう。

(1) よしの山峯の白雪いつ消えてけさは霞のた  
ちかはるらん（春・源重之）

(2) ふるさとのみかきの柳はるく／＼とたが染め

かけし浅緑ぞも（全・源道濟）

(3) 山桜手ごとに折りて帰るをば春のゆくや

人は見るらん（全・藤原登平）



(4) おのれかつ散るを雪とや思ふらんみのしる

衣花も着てけり (今・源 俊頼朝臣)

(5) 宿近くはなたちばなは堀り植ゑい昔をこふ

るつまとなりけり (夏・花山院御製)

(6) 思ひかねわかれし野辺を来てみれば浅茅が

原に秋風ぞ吹く (秋・源 道清)

(7) 人もこえ駒もとまらぬ逢坂の関は清水のも

る名なりけり (今・小式部内侍)

(8) 木枯の雲吹きはらふ高嶺よりさえても月の

澄み登るかな (今・源 俊頼朝臣)

(9) 河務はみぎはをこめて立ちにけりいづくな

るらん千鳥啼くなり(冬・藤原長能)

(10) 人しれずもの思ふことはならひにき花にお

かれぬ春しなければ(別離・和泉式部)

(11) わぎもこが袖ふりかけしうつり香のけさは

身にしむ物をこそ思へ(恋・源 兼澄)

(12) よしさらばつらさは我にならひけりたのめ

てまねは誰か教へし(念・清少納言)

(13) 濁りなき亀おの水を結びあげて心の塵をす

ぎつるかな(雑・上東門院)

(14) 住吉の松のしづ枝を昔よりいしくしほ染めつ

沖つ白浪 (全・太宰大貳長実)

(15) 思出もなきふるさとの山なれどかくれ行く

はたあはれなりけり (全・大江正言)

(16) 須磨の浦に塩焼くかまの煙こそ春にしられ

ぬ霞なりけれ (全・源俊頼朝臣)

(17) 谷のとを閉ぢやはてつる鶯の待つに音せで

春の暮れぬる (全・宇治入道前太政大臣)

(18) 降る雨のあしとも落つる涙かな細かにももの

を思ひくだけば (全・大納言道綱母)

まだこれ以外にも多くの歌がある。これは  
はほんの一例にすぎない。勿論、以上の歌の  
中には玄々集のみから採用した歌以外にもあ  
る。こうした歌は流布本には遂に姿をみせな  
かったものであるが、全体的にみて優美な情  
趣、趣向の典型的世界を詠み出し、写実性も  
そうした美の中から漸次現われ始めてきてい  
る。例えは(6)は長恨歌の心を詠んでいるが、  
いかにも写実的な素材として生かされてをり、  
(9)にしても単なる美ではなく、しんのある写実

美 な ど 同 時 代 の 作 家 に も 個 性 は 異 な る 。  (11) は	に は 清 少 納 言 の 智 性 。  (13) に は 上 東 門 院 の 伝 統	な い 。  (10) に は 和 泉 式 部 の 持 情 が あ り 。  一 方  (12)	坂 の 肉 を 詠 み 込 ん で い る 。  こ れ は 玄 々 集 に は	天 皇 の 御 製 に ふ さ わ し く 。  (7) に は 具 体 的 な 産	格 調 が あ り 。  い が 、 新 し い 趣 向 が あ る 。  (5) に は 悠 々 と し た	清 澄 な 余 情 を 漂 え て い る 。  (3) は 声 調 こ そ 乏 し	し ば く 速 べ て き た 如 く 三 奏 本 の 巻 頭 も 飾 り	そ う で あ る 。  こ れ は 玄 々 集 に は な い 歌 。  (1) は	的 姿 勢 が 参 加 し て い る の で あ る 。  (2) に し て も
---	---	--	--	--	--	--	---	--	--

以上 の如く これを 季細に みれば 夫々の 歌の	と ま で に は な つ て い な い が  (8)は 秀歌 である。	あ る 趣 向 を た た え て い る。  ま だ 俊 頼 の 代 表 歌	最 後 に 撰 者 俊 頼 の (4)・ (8)・ (16)に は い ず れ も 一 節	趣 の 中 に そ れ は 作 者 の 趣 向 が 内 在 し て い る。	合 化 し、 (15)・ (17)・ (18)は い ず れ も 玄 々 集 に あ り、 情	歌 人 で あ り、 新 し い 格 調 と 素 材 と が 緊 密 に 融	白 い さ え す る。  (14)は 作 者 長 実 も 金 葉 集 時 代 の	の 世 界 も あ り 新 古 今 が 近 づ て き て い る よ う な	伝 統 的 な 中 に う つ り 香 と 云 つ た 艶 な る 情 趣
---	--	--	--	--	---	--	---	--	---

一首づつには時代差もあり、玄々集、拾遺集、  
 後拾遺に採用された歌もあり、  
 そうでない歌  
 もあるが、いずれも俊賴が三奏本を改修する  
 時にみな採用したものはかりで、そこには俊  
 賴の撰歌意識によつてすべて統一されてい  
 るのである。玄々集の優美詠嘆の歌の多く反  
 つてきているのは事実であるが、それがい  
 ゆる三代集的な方向に逆もどりをしたので  
 なく、より近代的に近づけようとした俊賴の  
 撰歌姿勢のあつたことを見逃してはなら  
 ない。



新しく三奏本に採用された歌は凡そ、そうした意識のもとに俊賴の目に叶った歌であったのである。

(三) 初度本以来三奏本まで不動の歌

初度本が巻五までであるので、これまでの範囲をその対象として考えてゆく。この間に三奏本まで不動の歌の数は224首の多きに達している。その主要な歌のみについて述べる。

(1) あさ 緑 かす める 空の けしき に や 帝 盤 の 山 も

春を しる らん (春・少将公敏母)

(2) 梅 の 花 に ほふ あたり は よきて こそ 急ぐ 道 を

ば 行く べかり けれ (全・良暹法師)

(3) 今日 より や 梅 の 立枝 に 鶯 の 声 里 なるゝ はじ

め なる らん (全・春宮大夫公実)

(4) 今日 とて 越路 に 帰る 鴈 が おは 羽も た ゆく や

ゆき かへる らん (全・藤原経通)

(5) 風 吹け ば 柳 の 糸 の かた より に な びく に つ け

て 過ぐ る 春 か な (全・院御製表)  
白河院

(6) 吉野山峯の櫻や咲きぬらん麓の里にほふ

春風 (今・(攝政左大臣)忠通公)

(7) 花さそふ嵐や峯をわたるらん櫻波よる谷川

の水 (今・源雅兼朝臣)

(8) 白雪と遠の高嶺に見えつるは心まどはす櫻

なりけり (今・春宮大夫公実)

(9) 入日さすゆふくれなるの色見え下照ら

す岩躑躅かな (今・攝政家孝河)

(10) 嶋のおる野沢の小田をうち返し種蒔きてけ

りしめはへて見ゆ (今・津守國基)

(11) いづれをかわきてとはまし山里の垣根続き

に咲ける卯の花 (夏・大猷卿匡房)

(12) 雪としも紛ひもはてじ卯の花は暮るれば月

の影かとも見ゆ (全・江侍従)

(13) 圃くたびに珍しければ郭公いつも初音のこ

ゝちこそすれ (全・権僧正永縁)

(14) 夏山の青葙まじりのおそ桜初花よりも珍ら

しきかな (全・藤原盛房)

(15) 夜もすがらはかなく叩く水鶏かなさせる戸

もなき柴の仮屋を (全・源雅光)

(16) 照る月の光さえ行く宿なれば秋の水にもつ

らゝるにけり (秋・皇后宮攝津)

(17) 有明の月待つほどのうたゝねは山の端のみ

ぞ夢に見えける (全・師房公)

(土御内右大臣)

(18) 有明の月もあかしの浦風に波ばかりこそよ

ると見えしか (全・平忠盛朝臣)

(19) 十倉山峯の嵐の吹くからに谷のわけはし紅

葉しにけり (全・修理大夫顯季)

(20) 淡路島かよふ千鳥の鳴く声にいく夜寝がめ

の須磨の肉守 (全・源兼昌)

(21) しなが鳥猪名のふしはら風さえてこやの池

氷氷しにけり  
(全・藤原仲実朝臣)

(22) 神無月しぐるまゝにくらぶ山下照ばかり

紅葉しにけり  
(全・源師賢朝臣)

(23) 氷魚のよる川瀬にたてる網代本はたつ白波

のうつにやあるらん  
(全・皇后宮肥後)

(24) 衣手によごの浦風さえく  
てこたかみ山に

雪降りにけり  
(全・源頼綱朝臣)

(25) 降る雪に杉の青葉もうづもれてしるしも見

えず三輪の山もと  
(全・皇后宮攝津)

以上廿五首は、ほ人の一部にすぎない。こ  
れ以外にも同一作者の歌を選ぶとすれば多く  
の秀れた作品も得られるが、なるべく同じ人  
の歌は避け、作者を広げた。(これでも足りな  
いが)しかし、これらによつても金葉集の風  
体は十分に掴める。(但し、撰者俊頼と父経信  
の歌は別に後述する。)これらの歌は撰者俊頼  
の初度本編集の当初から三巻本に至るまで不  
変の作品でしかも当代作家という所に(一)、  
(二)  
で採用した歌と大いに相違する。



これらの歌にはいざれも古典的な美意識に  
 とらわれずに何か新しい内容、趣向、情趣を  
 自分らの手で開拓しようとする姿勢と意欲と  
 がみられる。それらを包むものとして緊張し  
 た新しい金葉時代特有の声調が胚胎して来た  
 ことも指摘出来るのである。それは後拾遺時  
 代の主情性を脱皮しようとする一つの新しい  
 路線であり、やがてみごとに開花し結実して  
 ゆく。その指導理念を与えたのが俊賴であり、  
 彼の演出により金葉集歌人達は一人々々の演

技を舞台の上でそれ／＼が工夫、研鑽を積んで  
 いったたのである。歌をみてゆこう。  
 (1) の面白さは「常盤の山（山城）」といふ子、  
 の山も春を知るとみたてた趣向にある。(2) も  
 梅の花の匂うあたりは急ぐ道も避けて通ると  
 みた趣向に中心があり、梅の花の咲いた所と  
 は去わずに匂うとした所にはやはりこの時代  
 の新らしさが出てゐる。(3) には「初圃ハツロ寫シヤ」と  
 いう詞書があり、その風情を詠んだもの。艶  
 なる情趣がただたよう。新古今の在界に近づい

界 に 立 ち い る 。 こ と に (9) は 攝 政 家 女 房 の 致 に	知 的 な 意 匠 が あ り 。 (9) (10) は 清 新 な 叙 景 の 世	界 に 近 づ い て い る 。 (8) は 艶 な る 情 趣 に や や 理	よ る 。 の 趣 向 の め づ ら し き 。 こ ハ も 新 古 今 の 世	風 格 を も つ 。 (7) に 於 け る 「 花 さ そ ふ 嵐 」 桜 波	(6) は 忠 通 歌 壇 の 形 成 者 自 身 の 致 。 た け 高 い	集 最 高 の 指 導 者 白 河 院 の 中 風 懷 も 新 し い 。	が た し か な 表 現 の 中 に 生 き づ い て い る 。 金 葉	と あ り 。 白 河 院 の 春 の 推 移 へ の 驚 き の 御 詠 嘆	て き て い る 。 (4) も 全 じ 。 (5) に は 「 柳 半 随 風 」
--	--	--	---	--	---	---	--	--	--

る。	五	も	(20)	(19)	(13)	っ	田	集	こ
他	首	感	に	(21)	に	て	園	時	う
の	の	じ	は	(22)	は	は	風	代	し
多	中	ら	ほ	(23)	豊	新	物	の	た
く	に	れ	の	(24)	か	し	を	と、	叙
の	も	る。	く	(25)	々	い	素	い、	景
致	金	以	と	も	々	意	材	き、	致
も	葉	上	し	す	中	匠	に	が	が
一	風	み	た	ぐ	に	だ	取	感	詠
々	な	て	た	れ	新	っ	り	じ	ま
列	る	来	風	た	し	た	入	ら	れ
挙	も	た	情	叙	い	に	れ	れ、	た
す	の	ご	の	景	風	ち	た	(10)	所
る	が	と	中	致	情	が	如	の	に
ま	十	く	に	で	が	い	き	「	い
で	分	僅	艶	あ	な	い	は	苗	か
も	感	か	な	る。	い	い。	当	代	に
な	得	二	る	(17)	(14)	(11)	時	」	も
く	さ	十	白	(18)	(15)	(12)	に	と	金
	れ		い		(16)		あ	い	葉
								う	

凡そこうした風情、趣向内容である。

さて、次に撰者俊頼自身の歌はどのようなのか。

また俊頼について金葉集に多く採用された父

経信の歌はどのようなものか。これらについて

では金葉集の内容を知る上に是非触れねばな

らない点である。

金葉集所載の俊頼の歌員は次の通り。

続類徒本の初度本44首 ↓ 二度本37首 ↓ 二

度精撰本(兼好本)31首 ↓ 三奏本(26首)という漸

減の方向をたどっている。初度本からすれば

41%減といひ比を弄してゐるのである。これは改修のたびに自作を削除してゆく俊頼の編集方針に基づくもので金葉集の真の姿はやはり三奏本といふことが出来る。即ち初度本から三奏本に至る不動の款はその中にあつても俊頼自身は特に認めていたものであろう。しかし三奏本の新入款は勿論、二度本に削除された中にも俊頼の款について秀れた作品のあることも忘れてはならぬ。次に三奏本までの不動の主な俊頼の款を考へてみよう。

(1) 山櫻咲きそめしよりひさかたの雲井に見ゆ

る滝の白糸（春）

(2) 帰る春卯月の忌にさしこめてしばしみあれ

の程だにも見む（今）

(3) この里も夕立しけり浅茅生に露のすがらぬ

草の葉もなし（夏）

(4) 山の端に雲の衣を脱ぎすて、ひとりも月の

立ちのぼるかな（秋）

(5) むら雲や月の隈をばはらふらん晴行くたび

に照りまさるかな（今）



(6)

すみのほるにや空をはらふらん雲の散りぬ

め秋の夜の月 (全)

(7)

うづら鳴く喜野の入江の浜風に尾花浪よる

秋の夕暮 (全)

(8)

音羽山紅葉散ららし逢坂の肉のわりに錦織

りかく (全)

(9)

はし鷹をと리카ふ沢に影見ればわが身も共

にとやがへりせり (冬)

(10)

万代のためしと見ゆる松の上に雪さへ積る

年にもあるかな (賀)

(11) 世と共<sup>に</sup>に玉散る床の菅枕見せは<sup>ば</sup>や人に夜半

のけしきを

(悪)

(12) 志草しげれる宿を来て見ればおもひのきよ

り生ふるなりけり (念)

(13) いつとなく悪にこがるゝ我が身より立つや

淡向の煙なるらん (念)

(14) いくかへり花咲きぬらん住吉の松も神代の

ものところそ聞け (雑上)

(15) なき陰に懸けける冬刀もある物をさやつか

の間に忘るべしやは (念)

(16) 世の中は憂き身にそへる影なれや思ひすつ

れど離れざりけり (念)

(17) せきもあへぬ涙の河は早けれど身のうき草

はながれざりけり (念)

(18) 阿弥陀仏と唱ふる声を梶にてや苦しき海を

漕ぎ離るらん (雑下)

以上のうち、古来から最も賞讃されてい

歎は(1)(7)である。縹渺とした遠白き美、気高

き神韻の美といつたもので、はや金葉集時代

の俊頼でなければ詠めないうた。歌でもあつた。

定家は「近代秀歌」(遺送本)の中にこの二首

ともしとりあげ、(1)に「これは晴の歌、

秀歌の本体と申すべきにや。」(7)に対しては「

これは出玄におもかけかすかにさびしきさま、

なり。と評している。後鳥羽天皇御口伝には

(7)に對し「うるはしき字也。故土御内内府亭

にて影供ありし時、親阿はこれほどの歌たや

すくはいできかたしと申されき」と評され給

い、全じく(7)は「八重口伝」(鳥家)にも「近代

よき歌と申しあひたる歌レの中の一首として採  
 用してゐる。今じく(7)は「レ宝玉集レ(長明)にも  
 「詞つゞき妙なる歌レの中の一首に入れ、レた  
 とへば浮文織物のなべての綾堅文の類ひにま  
 されるが如し。レとレいう比喻を以て賛仰してい  
 るのである。とレもあれ、(1)・(7)は俊親の名歌  
 の中の最高のもので、太田水穂が「俊親の好  
 みの美は落葉木に銀泥の雪を布いた林叢を思  
 はせる、或ひは雲に白鶴の群をちらしたごと  
 き色調と云つて見たらしい。」(「日本和歌史論中世篇レ」)

と評したのには蓋し適評である。

(2) (4) は俊賴のよく用いる擬人手法の歌で、

「かへる春」といい、「卯月の忌」(賀茂祭の

前に忌竹をたて致奮にさし籠る行事)に「さし

こめて」などの表現には、逝く春を生きものの如

くにみたてているのである。また(4)は(1)と全

く、「高陽院七首秋合」に出詠の歌で、「八雲御

抄」による「雲の衣をぬぎすて」の表現に

対し、康資王母が「なでふさることのあらむ

ぞ」と非難したとある。擬人法についての論

難であつた。『俊頼髄腦』にもこの事にふれ、  
 『秋にははにせ物といふ事あり。櫻を白雲によ  
 せ、ちる花を白雪にたぐへ、』とあり肯定し  
 て、いる態度がみられる。これはいわば伝統的  
 な秋の修辭の問題でもあつた。俊頼はこの技  
 法を多く用いて、いるのであつてこの二首はそ  
 のよき例である。(3)・(5)・(6)・(8)は優美の中に叙景  
 的な要素が加わつており、その意味では(3)が  
 最も秀れて、いる。(9)・(16)・(17)は俊頼の境涯歌で  
 身の不逞をかこつ秋は散木集にも非常に多い。



(9) は「鷹狩の心」を詠んだ歌で直接的ではないが  
 こうした素材の中にも身の運命をかこつ色調  
 になる傾向をもつ。特に(16)は傀儡<sup>くぐい</sup>までが名歌  
 の故に歌い歩き、永縁、敦頼入道が羨やまし  
 く思つた話まで「無名抄」は伝えていゝ。(10)(14)は  
 もと／＼観念的素材であるが、金尊集時代の  
 新らしを出している。この点中国の伝説にも  
 とづく(15)、仏画をみて詠じた(18)の秋歌も觀  
 想の世界ではあるが、それをもよく歌の世界に  
 具象化していゝ所に俊賴短歌の特質がある。

以上、初度本（続類徒本）から三奏本まで不

動の致についてみてきたが、次に二度本にあ

って三奏本に削除された致もかなり多く、そ

のうちの主な致をあげると左の通り。

(1) 春雨はふりしむれども鶯の声はしほれぬも

のにぞありける（春）

(2) 梢には吹くとも見えで桜花かをるぞ風のし

るしなりける（全）

(3) 待ちかねてたづねざりせば郭公たれと小山

のかひに鳴かまし（全）

(4) 風吹けば蓮の浮葉に玉越えて涼しくなりぬ

ひぐらしの声 (夏)

(5) 嵐もや葉守の神もたゞるらん月に紅葉の手

向しつれば (秋)

(6) 衣手のさえ行くまゝにしもとゆふ葛城山に

雪はふりつゝ (冬)

(7) 君が代は松の上葉におく露のつもりて四方

の海となるまで (賀)

(8) あさましやこは何事のさまざとは悪せよと

ても生れざりに (悪下)

などの歌あり、ことに(4)は客観的叙景歌として秀れ、(1)(2)(3)の一節ある趣向を有し、(6)の清澄ある冬の叙景歌もすてがたい。(7)は新しい賀歌といふべく、(8)には个性的恋の憂愁が漂ようている。その他八首は畧した。俊頼も惜しみつゝ、三巻本で棄てた歌であらう。

金葉集という勅撰和歌集の制限もあり、数度に及ぶ改修にあたり俊頼自身、白詠をどのようにに入集せしめるかについてはかなり腐心した。あとかげうかたえるか、結局以上のようにな

歌をいろ／＼と操作することにより、最後は  
 三巻本では26首に決定されたが流布本では  
 37首  
 をとどめるといふ結果になつたのである。

次に、父經信の金葉集の歌を考えてみるに、  
 經信の金葉集流布本における歌員は27首。(こ  
 の中三巻本にならぬ歌五首) 經信は、由來後拾  
 遺集時代の歌人であるが、若い通俊が歌壇の  
 宿老 經信をさしおいて後拾遺集撰者になつた  
 いきさつもあり、經信はその不満を「難後拾

遺しを書き果敢に論難した。経信の後拾遺集

採用歌は僅か六首。経信の真価は金葉集に多

く入集してゐる歌によつて發揮されたのであ

る。その主な歌は次の通り。

(1) あら小田に細谷河をまかすればひくしめな

はにもりつゝぞゆく (春)

(2) 賤の女が蘆火たく屋も卯の花のさきしか

ればやつれざりけり (夏)

(3) 五月雨に玉江の水やまさるらん蘆の下葉の

かくれゆくかな (今)

(4) 夕されは門田の稲葉おとづれてあしのまる

屋に秋風をふく (秋)

(5) 三笠山峯よりいづる月影はさほの河瀬のこ

ほりなりけり (全)

(6) 月夜よみ瀬々の網代による氷魚は玉藻にさ

ゆる氷なりけり (冬)

(7) 初雪は松の葉白く降りにけりこや小野山の

冬のさびしき (全)

(8) 旅ねする夜床さえつゝ明けぬらし外方が鐘

の声きこゆなり (全)



(9) 冬の夜の雪げの空にいでしかば影よりほか

に送りやはせし (悪下)

(10) 白雪とよそに見つれば足引の山もといろき

落つる瀧つ瀬 (雑上)

経信についても古来よりその賛辭は極めて

多い。古来風俤抄 (俊成) には

「彼大納言の歌の風俤は、又殊に歌のた、

けを好み、古き姿をのみ好みめる人とみえ

たれば、後拾遺の風俤を、いかばかり相

違して見え侍りけむかし。

と評し、その風傳のことに及び、後鳥羽天皇

御口伝にも、大納言經信殊にたけもあり、

う、る、は、し、く、してしかかも心たくみにみゆ。と具

体的にその秋風の特質をあげている。

この両書で一致しているのは、たけの五

るといふことであつた。壯大美を有して、

といふのである。これらの例款をみても、それ

は明らかなになつてくる。雄大にして清新を叙

呈款が強びて、俊頼とはまたおのづかと異なるつ

た	た	と	る	主	月	清	い	と	(16)	び
も	と	観	(2)	題	影	純	の	し	は	し
の	と	照	(3)	と	か	な	で	た	は	い
と	も	し	は	し	佐	秋	あ	た	月	情
つ	つ	た	夏	た	保	の	る	従	下	景
て	て	秋	の	客	の	月	。	来	の	、
い	い	で	川	観	で	で	恋	的	氷	(8)
る	る	、	瀬	風	あ	あ	の	で	魚	は
。	。	こ	に	物	り	り	(9)	な		は
(1)	(4)	と	に	詩			に	い	(7)	曉
(4)	は	と	(4)	で	伝	。	し	新	は	の
は	よ	に	は	あ	統	。	て	味	松	旅
く	く	(4)	は	り	的	な	も	が	の	ね
田	田	は	卯	、	な	秋	冬	発	初	に
家	家	経	の	あ	の	の	の	想	雪	き
の	の	信	花	(5)	夜	月	の	さ	と	く
風	風	の	、	は	の	で	艶	れ	十	鐘
物	物	絶	五	三	を	は	を	て	小	声
		品	月	笠	叙	な	主	い	野	の
		で	雨	山	した	な	題	る	山	あ
		て	を	の	た			。	の	ひ
		て							さ	

しさを、(10)には山の滝を白雲によそえてしか  
 もこれを生きて把握している点経信短歌の真  
 髓といえろ。以上わづか金葉集の範囲内で十  
 首の歌にすぎないが、こうした僅かな中にも  
 経信の特色は煮つめられて見ることか出来る  
 のである。それは白銀の清純ななかに艶なる  
 新粧をこうした金葉集の美であつた。

経信 ↓ 俊頼 ↓ 俊恵  
 美の系譜はやがて定家などか新古今の美とし

てうけついでゆくのであるが、金葉集には

勿論また多くの演技者達はいらる。藤原公実、  
顕季、忠通、長実、顕輔、匡房、国信、神祇  
伯顕仲、源顕仲、基俊、俊忠、永縁、行尊、  
雅光、肥後、紀伊、前育院三條、大貳、安芸  
参河等の貴紳、女房を始めその他多くの歌人  
連が俊頼を中心にして金葉集という舞台上で演  
を競い、ここに金葉集時代の新しい錦繡綾を  
なす美を織り出したのである。